皆々談合す

聞きたるかと問ふ。旅人の通る事は能にてはせざれど。判官の詞にて其事實のありたるやうに思はするなり。シテ何とも承らずと答ふ。安宅の湊に新關を立てゝ。山伏を固く撰むとこそ申しつれと。判官又かたる。これはゆゝしき御大事なりとて。此傍にて暫く御談合あるべきよしを述べ。更に一同に向ひて。皆々心中の通りを御申しあるべしと議す。二番目のツレ。「我等が心中には何程の事の候べき。唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候」とはやるを。シテ「暫く」と留め。「仰せの如く此關一所打ち破つて御通りあるは安き事にて候へども。御出て候はんずる行末が御大事にて候」と述べ。更に判官に向ひ手を突きて。「唯何ともして無異の儀が然るべからうずると存じ候」と述ぶ。シテに千金の價ある所なり。それより一策を廻らして。判官を強力に出て立たせ。笠を深くして其顔を隠さん事を建議し。判官同意して兜巾篠懸を取り。笈を負ひ

能のしなり　一の巻

判官強力となる

アヒ關の様躰を見にゆく

笠を被りて金剛杖を突く。此仕度の間にシテは強力を呼び。關の様躰を見て來れと命ず。強力は橋掛に行きかけ。「さても〳〵難儀な事を仰付けられた事かな。是非に及ばぬ見て參らずはなるまい。さりながら咎められては如何ぢや。まづ是は取つて參らう」とて。兜巾をはづして懐中し。橋掛にゆき一の松にて。「あれに見ゆるが關ぢや。さても〳〵おびたゝしい躰かな。屋倉かいだてを上げ。中々用心きびしい躰ぢや。やあ又あの木のそらに。何やら真黒なものが四つ五つ掛けてあるは何ぢや。山伏のこゝぢや」といひ我首筋を押さへ。「さても〳〵痛はしい事かな。餘り痛はしい事ぢや程に。一首つらねて歸らう。山伏は貝ふいてこそ逃げにけれ。誰おひかけてあびらうんけん。あびらうんけん」といひて舞臺に歸り。シテに關の様躰を告げ。一首つらねたる事など語り。「汝はこざかしき者にて候。やがて御跡より來り候へ」といはれて後見柱の處にくつろぐ。此時シテより「やがて貝を立て候へ」といはれて。扇を開き貝の心にて要の處を口に當て。「づわい〳〵」というて吹き鳴らしながら座にかへる事あり。是は貝立と稱へて。重き習とする事なり。

貝立

シテ「さらば御立あらうずるにて候」といひて。判官はじめ皆々立ち。シテ「げにや紅は園生に植えても隠れなし」と歌ひて判官の容貌の隠し難きをいひ。ツレ「強力にはよも目を懸けじと。御篠懸を脱ぎ替へて。麻の衣を御身にまとひ。」シテ「あの強力が負ひたる笈を。」判官「義經取つて肩に掛け。」ツレ「笈の上には雨皮形箱とりつけて。」判官「綾菅笠にて顔を隠し。」ツレ「金剛杖にすがり。」判官「足いたげなる強力にて。」地「よろ〳〵として歩み給ふ。おん有様ぞ痛はしき」と。謡の文句につれ判官二三足杖つきながら歩み出だす。ツレ一同に判官の方に向き。跡より歩みゆく心をあらはす。

シテは我等より跡に引き下つて御出あれと判官に申し。さらば皆々

関にゆきかゝる

御通りあれとツレ一同に告ぐ。是よりシテ先に立ちて關にかゝる心にて橋掛に行き。幕際より廻りて舞臺に入る。此時判官は後見座にくつろぎてずッと跡に後れたる姿を思はせ。ツレは殘らずシテの跡につきて幕際より廻り。一の松の處まで來て舞臺の方を向き立ち居る。

ワキ呼び留む

シテの橋掛に來かゝるを見つけて。太刀持は山伏の大勢御通りあるよしをワキに告ぐ。ワキ立ちてシテの仕手柱を越すを見て。「なふなふ客僧達これは關にて候」と呼び留む。シテは覺悟の前なれば少しも驚かず。「是は南都東大寺建立の爲に。國々へ客僧を遣はされ候。北陸道をば此客僧承つて罷り通り候。まづ勸に御入り候へ」といふ。勸とは寄進の勸誘に應じ給へとの意なり。此に於てワキは其いはれを述べて。山伏に限り留むる關なる由を告げ。殊に是は大勢の同行なれば一人も通すまじと拒む。それは作り山伏をこを留めよとの仰は

ワキとシテと論じ合ふ

有りつらめど。誠の山伏は差支あるまじとシテ問ひ返すを。太刀持進み出てゝ。「あゝ無用の事な言はしましそ。昨日も三人まで切つて懸けて候よ」と言ふを。「さて其切つたる山伏は判官殿か」とシテ詰め寄せ。「あらむつかしや問答は無益。一人も通し申すまじい上は候」とワキ怒り。「さては我等をも是にて誅せられ候はんずるな」と。シテ力折れて嘆息せしが。忽に決心して。「此上は力及ばぬ事。さらば最期の勸を始めて。尋常に誅せられうずるにて候」とて。シテを始とし。おの〳〵一人づゝ舞臺に來りては。兩手ひろげて大口の後ろを取り。膝突きて安座し。杉なりに並ぶ。今や決死の勤行に掛かる處なれば悲壯の極なり。山伏の起りを述ぶる掛合の詞ありて。即心即佛の山伏を討ち留め給はん事は。明王の照覽。權現の神罰。立どころに疑あらじとて。數珠さら〳〵と一同に押し揉むを見て。ワキは感じたるにや恐れたるにや。東大寺の勸進ならば。勸進帳を讀めといふ。

最後の勤なす

勸進帳

シテ是には困却せり。されど智謀ある辨慶の事なれば。忽に一計を案じ出だし。「心得申して候」とて。笈の中より往來の卷物一卷あるを取り出だして。假に勸進帳と名づけ。正面に出でゝ朗讀す。されど其文章が書きてあるものならねば。口に出まかせ即席に讀み立つるを。ワキは時々のぞきて見んとす。見せまじとす。それのみか文章も胸中に作らざるべからず。此間若心いふばかりなきを見せも聞かせもする事なれば。勸進帳は他の正尊の起請文。木曾の願書と共に。三讀物と稱へて重き讀物のそも〳〵讀物は。朗讀する文章にて。歌にはあらず。されども節あり大小鼓の合方ありて。カタリや詞とは固より異なり。三讀物の内にても。願書は唯平家追討の功を奏せん事を神に祈るのみの心なれば。さしたる趣も無けれど。起請文は當座を黑めて下には義經を討たんとする姦雄の心を含めたれば。讀むにも其心あるべく。勸進帳は主君の萬死を出でゝ一生を得せしめんとする誠忠の心より出てたれば。おのづからワキの肺肝を刺す程の氣がゝりなかるべからず。文中に緩急あり。「かほどの靈場の」よりは諭すゝみてノリ強く。急き讀み終りて關を越さんとの精神先に立ちたるが如く。「歸命稽首うやまつて白すと。天も響けと讀み上げたり」と讀み終るを聞きて。「關の人々膽を消し」とワキは其實際を述べ。「恐れをなして通しけり」と地にて受け。「急いて御通り候へ」とワキの詞ありて。シテ卷物を後見にわたし。又橋掛にねりゆき幕際まで行くと。ツレも跡につきて橋掛に並び居る。判官遙あとよりゆく心にて後見座より立ち。仕手柱の邊まで來ると。太刀持は判官の御通りなるよしをワキに告ぐ。ワキは直に「いかに是なる強力とまれとこそ」と言ひ掛くると。判官下にすわる。橋掛にてはツレ一同に之を見て。「すは我君を怪しむるは。一期の浮沈極まりぬと。皆一同に立ち歸る」と。小サ刀の柄に手を掛け。

判官怪しまる

ツレ激して留る

ワキの方を振りかへり見る。シテ慕際より兩手ひろげて走りより。「あゝ暫く。あわてゝ事を仕損ずな」と。押し留むる。判官の運命累卵よりも危く。辯慶の任務泰山よりも重し。見物人をして手に汗握らしむるは此處なり。

シテは進みて舞臺に入り。判官の下に居るを見て。「やあ何とてあの強力は通らぬぞ」と問ふ。「あれはこなたより留めて候」とワキ答ふ。シテ「それは何とて御留め候ぞ。」ワキ「あの強力がちと人に似たると申す者の候程に。さて留めて候よ。」シテ「何と人が人に似たるとは。珍しからぬ仰にて候。さて誰に似て候ぞ。」ワキ「判官殿に似たると申す者の候程に。落居の間とゞめて候」忙中に閑ある問答などありて。シテは判官に向ひ。「判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くは。能登の國まで指さうずると思ひつるに。わづかの笈負うて跡に下ればこそ人も怪しむれ。總じて此程。にっくし〳〵と思ひつるに。目に物見せてくれんとて」と。其持ちたる金剛杖を手に取り上げて。判官の被りたる笠の緣を二つ程打ち。「通れとこそ」と杖にて押し遣ると。判官は立ちて後見座にくつろぐ。ワキ猶判官に目を掛くるを以て。シテは急に迫り。「笈に目を掛け給ふは。盗人ざうな」と。耻かしめつゝ詰め寄する。斯くと見るより。橋掛なるツレは一同に走り入りて。シテの後よりワキの方へと押し寄するを。シテは制しつゝ金剛杖にて押しもどす。又押し寄する。又押しもどす。又押し寄する。ワキも刀の柄に手を掛けて用心怠りなかりしか。シテ遂に制しおふせて手を出さずして止みたれども。其勢は當るべからず。「十一人の山伏は。打刀ぬきかけて。勇みかゝれる有樣は。いかなる天魔鬼神も。恐れつべうぞ見えたるの文句。形容し得て餘せり。

ワキ之にや辟易しつらん。「近頃誤りて候。早々御通り候へ」といひ。太刀持急いで御通りやれ〳〵」といひて。二人共立ち囃子方の後にく

判官を打つ

ツレ押し寄するシテ押しもどす

疑とけて通さる

つろぐと同時に。ツレ一同に脇座の下地謠の前より囃子方の前かけて立ち並び居ると。判官笈と笠とを取り。兜巾篠懸して脇座の處に來り。シテ後見座より出て丶。先の關をば程隔たりたれば。此處に御休息あるべきよしを告ぐ。此に於て判官以下一同下に居る。途中にて休息の躰なり。

シテの無禮なる判官に謝す

シテ判官の前に進み出て。臣の身として君を杖にて打ちたるの無禮を謝し。是と申すも君の御運の盡きたるかと思へば淺ましうこそ候へといふを。判官打ち消し。汝が唯今の機轉は。更に凡人のわざとも覺えず。是れ全く八幡の御助ならんとて辨慶を慰む。君臣の情。思ひやられて涙とどめがたし。さてサシとなりて。「唯さながらに十餘人。夢のさめたる心地して。互に面を合はせつ丶」と。ツレを見まはし。「泣くばかりなる有樣かな」と。判官の方へ向き落涙する心にて低頭す。判官もツレも共に同情を表する心にて。シテの方を見る。

クセ

ワキ追ひつき留むる

クセは居グセにて。判官の忠勤と勳功とを述べ。かくまで身を盡したるかひもなく。讒臣のために陷れられて。今日の有樣となりはつるは。神も佛も無き世かやと恨み。判官は涙を拭ひ。シテは落涙して御前に畏まるを以て終る。形は無けれど。安宅一番の感慨は此クセの内に盡きたりといふべし。然るに何か習事の時になると。クセを省く事あるは惜しき事この上もなく。すべて是に限らず。完全したる文章を。能の都合によりて省く事は。能の本意にも謠の本意にもあらねば。止めたきものと思はるゝなり。

此クセの間にワキと太刀持とは橋掛に行きて立ち居り。謠すみて。先には山伏達に無禮を申したるにより。之を謝せんがため。酒一つ參らせたければ。汝は追付きて留めよといふ。よりて太刀持は舞臺の方に來り。皆々の休み居るを見て案内を乞ひ。その由を言ひ入るれば。シテは心得て判官に向ひ默禮すると。判官は又强力になる心

にて後見座にくつろぎ。シテもくつろぎ。ワキは舞臺に入りて判官の居たる跡に着座す。

シテ立ちて橋掛にゆき。「げに〳〵是も心得たり。人の情の盃に。受けて心を取らんとや。是につきても猶々人に。心なくれそ呉はとり」と。心中を獨言ち。「あやしめらるな面々と」と。目くばせする心にてツレに向ひ。「さらりと囲居して」と舞臺に入り下に居て。菊の酒を飲まうよ」と一同に向ひて酒宴を開く心あり。それより立ちて。目附柱の方より山水の落ち來るを見あげ。「おちて巖に響くこそ」と拍子一つ踏みて。「鳴るは瀧の水」と延年の舞の唱歌を歌ひながら。扇開き仕手柱の方へ行き。流れゆく山水に浮べたる盃を取り上ぐる心にて一つすくひ。酌をする心にてワキに向ひ。「たべ醉ひて候ほどに。先達御酌に參らうずるにて候」といふと。ワキは一さし御舞ひ候へと所望す。再び「鳴るは瀧の水」を歌ひ。シテは扇を疊み達拜掛の男舞となる。男

シテとワキと宴を開く

達拜掛の男舞

とは。安宅蘆刈小督小袖曾我などの如く。直面なるシテの男姿にて舞ふ舞の名なり。達拜掛とは拜禮をしながら舞に掛かる仕方にて。貴人などの御前にて舞ふ意味なり。

舞の上りは和歌にて「鳴るは瀧の水」と扇を上げ。「日は照るとも」と拍子を踏み。「とく〳〵立て。や手束弓の」と。ツレを見まはして長居すべからざるを示し。「關守の人々いとま申して」と。ワキへ辭儀をなして暇を告げ。「笈をおつとり肩に打ち掛け」と。扇にて笈を肩に掛くる仕方をなし。「虎の尾を踏み毒蛇の口を」と。立ちて數の拍子ふみ。「のがれたる心地して」と乘込ありて。「むつの國へぞ下りける」と留拍子ふみ。皷の頭きゝて扇をたゝみ樂屋に入る。判官とツレとは「心ゆるすな關守の人々」と。シテ辭儀する處あたりにて。早足に樂屋に入るなり。

觀世流にて此能の番組に觀進帳と小書せるは。觀進帳をシテの獨吟する事を知らせたるにて。此小書なき時は地謠にて歌ふ定

まりなり。故に謡本には同吟の同の字をしるしてあり。

また延年之舞といふ秘事ありて。男舞の處に古代行はれし延年の舞の手を學ぶ事あり。笛も重き習とするものなりとぞ。

瀧流といふ曲は。梅若舞臺にても能樂堂にても。梅若實のものしたるを屢ば見たり。今その記憶に殘れるをいはゞ。クリとサシとクセと拔けて。「八幡の御託宣かと思へば」の文句のあと。直にワキと太刀持との問答となりてシテへの案内となり。「おもしろや山水に」とシテ立ちて仕手柱の方へ行き。扇を開きながら目附柱の方へ出でゝ。兩手に持ち盃の心になして山水へ落し置き。少し跡にさがり盃の處をとくと見て。「いざや舞をまはうよ」と。もとの座に歸り。「これなる山水の」と又立ちて目附柱の方へ出で。上より下に水の落ちくるを見て。胸ざしゝて拍子ふみ。「なるは瀧の水」とすくひて酌をする事なく。從つて其詞も「なるは瀧」の返

しも拔けて。直に達拜がゝり男舞となり。二段目取りて。扇持ちたる心にて左の手を前に出して橋掛幕際までゆき。欄干際に出でゝ上より下に見おろし。段々に舞臺の方に水の流を見ながら歩み行き。早舞のクッロギのやうに。眞中にて一つ沈みて。あとは常の男舞となり。トメの處は仕手柱より前に落しおきたる扇を見て進み出て。兩手に持ちて「なるは瀧の水」と和歌を歌ひながら跡にさがり。「日は照るとも」以下は常の形ありて。「いとまを申して」とワキへ辭儀したる後橋掛にゆき。一の松にてとくとワキを見込み。幕際までゆきて正面むき。イウケン扇二つして。常の如く右受け拍子ふみ留めたり。

また去る十月に梅若萬三郎の酌掛之舞といふを見たりしは。「落ちて巖に響くこそ」と拍子ふみ瀧を見て。扇を開き目附柱にて一つすくひ。「鳴るは瀧の水」と歌ひながらワキに酌をして。此あと

の文句ぬけ。立ちて二三足さがり瀧の方へゆき。見上げて跡へ少し下り。こゝにて男舞の譜となり。一の松にゆきて扇を傾け。欄干外に酒をこぼし捨つる形ありて。舞臺に入り片左右して上扇をなし初段となる。あとは五段にて別に替りなく。キリの「とく〳〵立てや關守の人々」とツレの立つ時。小鼓が乙のナガシを打ちたりしは勇ましくも快くも聞えたり。但し是は瀧流の時にもある事と記憶す。

安達原 一名 黑塚

作物 庵 わくかせは

前ジテ あるじの女

近江女又は曲見(時によりては姥) 葛 葛帶 指

唐織

後ジテ 鬼女

般若 結 腰卷 腰帶 打杖 扇 負柴

ワキ及ワキヅレ 山伏

兜巾 大口 水衣 袈裟 腰帶 イワタカ 扇

アヒ 能力

兜巾、狂言袴 脚半 水衣 腰帶 扇

山伏二人ゆきくれて陸奥の安達原に宿りしに。あるじの女は糸車など繰りて見せたるが。餘りに夜寒なれば上の山に柴取りに行かんとて。留守の間にわらはが閨の内を見給ふ勿れと堅く言ひおきて出てぬ。されど其約束に背きてのぞき見たるに。人の死骸を積みおきたるが恐ろしければ。是にまかせて逃げのきたるを。あるじは鬼の姿になりて歸り來り。閨を見られたるが口

能のしかり 一の卷

をしきとて打つて掛かるを。遂に法力もて祈り伏するといふ筋を作れる能なり。鬼事と稱へて多くはキリの能に用ふ。太鼓あり。季節は秋。土地は安達原の一つ家。

作物出づ
ワキ出づ

囃子方着座すると。庵の作物に引廻しを掛けて持ち出で。大小の前に置き。後見引くと次第になり。山伏姿なるワキとワキツレと出てゝ舞臺にて向き合ひ。「旅の衣はすゞかけの」を歌ふ。それより本山紀州の熊野を出でゝ日を重ね。陸奥の安達が原に着きたるよしの道行あり。「あら笑止や日の暮れて候。此あたりには人里もなく候。あれに火の光の見え候ほどに。立ちより宿を借ばらやと思ひ候の詞あり。

シテ謡ひ出す

ワキとツレとは脇座の方にゆきて立ち居ると。作物の中にてシテ「げにわび人の習ほど。悲しき物はよもあらじ」と歌ひ出だす。我生涯のかなしきよしを嘆息して。賤の女の實況を述ぶる心なり。尤も引廻しは道行のトメに取りのけられば。荻もてまばらに圍ひたる間より。

ワキ宿を借り得て内に入る
ワクカセハ出づ

シテの姿は見え居るなり。

ワキ案内をいひ。シテ誰なるぞと問ひ。一夜の宿を借らん事を求め。月だにたまらぬあばら屋には留めがたしと斷り。たゞ〳〵貸し給へと重ねて乞ひ。シテやう〳〵承諾して。「さらばとゞまり給へとて」と。みづから立ちて庵の戸を開き。ワキに向ひてすわる處。閨より出てゝ客を一室に通したる心なるべし。この處の文句。「巽草もまじる荒蹊。うたてや今宵敷きなまし」といひ。「かたしく袖の露ふかき」といひ。「草の庵のせはしなき」といひ。旅寐のわびしき樣を述べつくして餘あり。

此初同の謡の内に後見糸繰車の作物を持ち出でゝ舞臺の先に置く。ワクカセハと名づけたり。謡すむとワキ之を見つけ。何といふ物ぞと問ふ。シテは其名を告げて賤の女の營むものなりと語れば。夜もすがら其糸を繰りて見せよと所望す。

シテ立ちてワクカセハの前に座し。述懐の謠あり。「月もさし入る」と。見あぐる形などありて。「まそうの糸をくりかへし」の次第にて糸を繰り。また謠いろ〳〵ありて。糸盡しの文句のロンギとなり。「今はた賤が繰る糸の」と又繰り。「思ひ明石の浦千鳥」と繰り止めて。「音をのみ

糸を繰る

獨り泣きあかす」としをる形あり。秋の風さびしく庭の芭蕉を吹くを聞く。

シテはワキに向ひ。「除りに夜寒なれば。上の山より薪を取り來りて。焚火して當て申さんといひ。立ちて仕手柱まで來りしが。俄に思ひ出だしたる如く。「や」と足ふみとゞめて立ち歸りワキに向ひ。「わらはが歸らんまで此閨の内ばし御覽じ候な」と述べ。更にツレにも同じ詞をくりかへし。山にゆく心にて樂屋に入る。此時一の松まで行きてワキを見込み。安心したる心にてさら〳〵と足を運ばせ。走り込みにして入るもあり。

中入

アヒ

幕おりると能力の狂言役者後見座より出て、獨言を述べ。又ワキの問答をなす。其あらましは。

アヒ「さても〳〵奇特なる事かな。此陸奥の人倫たえたる所に住む人の慈悲心の深いは。如何に夜寒にあればとて。女の身として夜中に山へ分け入り薪を取つて參り。火にあて申さんとの志は。さりとては奇特なる事にて候。旅はなさけ人は心と申し傳へたるが。情なうては阿闍梨も我等も修行は成りがたい。さりながらこゝに不思議なる事の候。今夜のあるじは何とやらん餘の女人にかはり。物凄い躰に覺えて候ところに。山へ參りさまに童が閨の内御覽候なと申した。人にこそ依れ。阿闍梨に向うて閨の内御覽候なと申したは。不審に存じ候間。阿闍梨へ此由申さばやと存ずる。

といひてワキの前に出て。

能のしをり　一の卷

安達原

いかに申し候。今夜のあるじは奇特に御宿まねらせては候はぬか。ワキ「げに〳〵お事が申す如く。今夜のあるじは奇特なる志にて候に。アヒ「誠に今夜のあるじの樣な志は。稀に御座有らうと存ずる。さりながらこゝに奇特なる事の候。餘の女人にかはり。何とやらん物すごいやうに覺えて御座あるが。殊に山へ參りさまに。我等が聞の内御覽候なと申したるは不審に存ずるが。何と思召し候ぞ。ワキ「誠に汝が申す如く。此阿闍梨に向ひて聞の内を見申すなとは。何とも不思議なる事にて候よ。アヒ「さては左樣に思召すは。我等の存ずるも同じ事にて候程に。あるじの閨を見て參らうと存ずるが。何と御座あらうずるぞ。ワキ「いや〳〵あるじの堅く見申すなと申され候へば無用に候。アヒ「いや我等の見申したる分は苦しからぬ事で御座ある程に見て參らう。ワキ「しかと無用にて候。其

上汝もまどろみ候へ。

こゝにてワキもワキヅレも扇を顔にあてゝ眠る。アヒも扇を額に突きて寢る躰をなし。ワキの眠りたるを窺ひ靜に立たんとするを。ワキ見つけて。「汝は何事を致すぞ」と叱る。「いや癪がへりを致しました」とアヒ答へて。ワキもアヒも又眠る。暫くして又抜け出でんとするを。「何事にてあるぞ」とワキ又叱る。「いや草臥れまして咳きを致しました」とアヒ答へ。又ワキもアヒも眠りしが。暫くすると此度は仕損ぜずに抜け出でゝ橋掛にゆき。

なふ〳〵嬉しや〳〵。先づ側を忍び出た。いざとい御方ぢやに依つて出し抜きかねた。總じて某は悴の時より癖て。人の見よといふ物は見たうも無し。見なといふは見たうて得こらへぬ。是もあるじが御覽ぜなと申したに依つて見たうてどうも堪忍がならぬ。見たというて後に叱られうとまゝよ。さらば少しのぞかう。

というて舞臺に行き。作物をのぞき見て橋掛へ逃げのき。

さても〳〵恐ろしや。かくいうたこそ道理なれ。閨の内には死骨白骨は積りもなし。人の死骸は軒とひとしく積み重ねて置いた。人間では有るまい。まづ此よし申さう。

とてワキの前に至り。

見て御座る。ワキ「見たるとは何事にてあるぞ。アヒ「無用と仰せられ候へども。餘り見たさにあるじの閨を見て御座れば。死骨白骨は積りなし。人の死骸は軒とひとしく積み重ねて置いて御座ある。人間にては無く候。是に御座あらば命を取り申さう間。急いて何方へも御のき候へ。ワキ「近頃なる事かな。さあらば立ち越え。様子を見うずるにてあるぞ。アヒ「急いて御覽候へ。

といひて引くと。ワキとワキヅレと立ちて作物を見る一段となる。

ワキ間の内なる見て幼ぐる

後ジテ出づ

ワキはワキヅレと共に作物に向ひ。「不思議やあるじの園の内を」以下の謡ありて。「心も惑ひ肝を消し。行くべき方は知らねども。足に任せて逃げてゆく」と。二三足逃ぐる心にて歩み出だすと。太鼓打ち出しありて出端になり。後ジテは盤若の面にて摺箔に腰巻し。柴に唐織まきつけたるを背負ひつゝ。今山より歸りたる體にて出で來りしが。ワキの逃げゆくを見つけて。「如何にあれなる客僧とまれとこそ」と呼び掛け。一の松に立ちて。「成陽宮の煙ふんぷんたり」と負柴を捨て。「野風山風吹き落ちて」鳴神稲妻天地に滿ちて」など。物凄くながめわたす形などありて。「ふりあぐる鐵杖の勢」と手に持てる打杖を振り上げ。ワキをねめつくると。ワキとツレとは仕手柱際まで進みて。柱ごしに數珠押し揉みつゝ祈り伏せんと掛かる。それよりシテは舞臺に入り。ワキに向ひては祈られ。祈られては又向ふ。此間謡なくして太鼓と大小鼓に笛のアシラヒあり。名づけてイノリの段といふ。

イノリ

イノリは惡魔調伏の時の所作にて。先づ通例は。道成寺葵上安達原の三番とす。されども其心持はおの〳〵違ひて。道成寺は蛇体。葵上は生靈。安達原は鬼。似て似ざる處が能の妙なり。さてイノリは三段にて。初段は舞臺にてワキを追ひつめ。二段目は一の松にて仕手柱ごしに打杖振り上げ。終の段は再び舞臺にワキを追ひつめて。振りかへり作物に手を掛け打杖振り上げ居ると。ワキ「東方に降三世明王」を歌ひ。これより經文かずゝ〳〵ありて。又ワキの前に詰めよすると。「祈り伏せにけりさて懲りよ」と。シテの跡にたじ〳〵と下るを。ワキ走りよりて數珠にて打つ。シテぺたりと安座して。「今まではさしもげに」と歌ひ。地の返しありて。「怒をなしつる鬼女なるが」と打杖突き立て氣張りしが。「忽によわりはてゝ」と打杖すて扇開き。「天地に

キリ

身をつゞめ。「まなこ暗みて。」「足もとはよろ〳〵と」など。文句に合はする形ありて。「安達が原の黒塚に。隠れ住みしもあさましくなりぬ」と。作物を見上げ。「耻かしの我姿やと」と扇にて顔を隠して。「夜嵐の音に立ちまぎれ失せにけり」と。乗り込み留拍子すみて楽屋に入り。ワキとツレとも其跡より入る。

安達原の替之形には。黒頭。白頭。長糸の傳。急進之出など色々あり。黒頭は後ッテ黒頭を用ひ。白頭は前姥にて後は白頭となり。長糸は糸を繰る事いつもより長き處に秘事あり。急進は後の出端の處が早笛となる。なほ何れも此外に緩急などありて少しづゝ常のとは相違せり。「いふ磐はなほ物すさましく」と楽屋に入りワキに留めさせて。幕の中にて「失せにけり」と留拍子ふむ仕方も見たる事あり。

蟻通

シテ　蟻通明神

小尉　尉髪　烏帽子　大口　狩衣　腰帯　扇　松明　傘　帽

ワキ　紀貫之

風折　厚板　大口　長絹又は狩衣　腰帯　扇

ワキヅレ　従者

素袍上下

紀貫之玉津島に参詣の途中。夜蟻通明神の社を過ぎけるが。雨くらくして咫尺を辨ぜざるが爲め。神前とも知らず乗馬のまゝにて行かんとせしに。馬にはかに病みて進まず。如何にせんと躊躇する處に。明神は社人となりて現はれ給ひ。こゝは馬にて乗打する事を神の禁じ給ふ處なり。馬の病みたるは其神罰に依

れり。御身貫之ならば和歌を詠じて神に謝罪し給へと告げ。よりて。和歌を詠じ。社人をして祝詞を參らさしめしが。社人と見えしは明神にて。遂に御姿を隠し給ふといふ筋を作れる能なり。本脇能にはあらざれど。神能の一つにて初番に用ふ。太皷あり。季節なし。土地はその社前。是はシテも重きものなれば。ワキも中々輕からぬものとせり。

ワキの次第

次第にて紀貫之に出て立ちたるワキ出て。「和歌の心を道として。玉津島に參らん」を歌ひ。地取すみて紀の路の旅に趣くよしの名乘あり。

乘馬惱む

道行を歌ひ。詞になりて「あら笑止や」と正白先へ出て。「しかも乘りたる駒さへ伏して」と。左右左と我馬を見る心にて下に目を附け。たじ〳〵と大小前へ下り。「前後を辨へず」と安座して正面をとくと見。「暗うしては數行虞氏が淚の雨の。足をも引かず雖ゆかず。恐意いかゞすべき便もなし。あら笑止や候」と歌ひ終りて。靜に脇座に行き下

能のしをり　一の卷　二百二十一

シテ出づ

に居る。此處寶生金五郎のしたるを此夏見たりしが。唯左右左と見るのみにても。病み伏したる馬の打てども行かぬ姿を想像し。燈暗うしてと聞きたるのみにても。雨ふりしきりて神前の燈のほのぐらきさまを目に見る心地して。さすがは名人よと感じたる事ありき。大小アシラヒにてシテ出づ。尉面に翁烏帽子。より狩衣大口といふ姿にて。左に爪折傘をさし。右の手に松明を振りつゝ容る。傘はさゝぬ流儀もあれど。雨夜を知らずするには有る方が趣をも添ふべし。又松明を傘さして持つは如何との考ゆゑか。燈籠の作物を提げて出づる事に改正したる時代もありしと聞けど。今は行はれず。傘は雨をあらはし。松明は「なふ〳〵其火の光について」といふ文句の意味なれば。能としての興味こそあれ。何の妨かはあらん。

さて一の松にて踏み留め。正面むき松明一つ振り照らして。潯湘の夜の雨しきりに降つて。遠寺の鐘の聲も聞えず」と歌ひ。雨くらく夜

ワキ同じく掛く

さびしき景色を思はせ。「社頭を見れば燈もなく」と。松明高く上げて社頭を舞臺の先の方に見込み。「宮守一人も無き事よ」と歌ひ終つて舞臺に入り。「あら無沙汰の宮守どもや」と。又松明を上ぐると。ワキは見つけて。「なふ〳〵其火の光に就いて申すべき事の候」と詞を掛く。シテ答へて。「此あたりには御宿もなし。今少し先へ御通りあれ」といへば。ワキ又「今の暗さに行く先も見えず。しかも乘りたる駒さへ伏して。前後を忘じて候なり」と述ぶるをシテ打ち消して。「さて下馬は渡りもなかりけるか」と。乘馬のまゝに通らんとしたりしかと詰問し。ワキは更に。「そもや下馬とは心得ず。こゝは馬上のなき處か」と。始めて下馬の事に心付きて問ひ返し。「あら勿体なの御事や。蟻通の明神とて。物とがめし給ふ御神の。かくぞと知りて馬上あらば。よも御命は候べき」と。シテに教へられて。「さて御社は」と問へば。「此森の内」と答へ。「ともし火の光より見れば」と。松明上げて鳥居のあたり

初問

を示す心あり。「げにも宮居は」とワキは認め。「ありどほしの」とシテ受けて。「神の鳥居の二柱。立つ雲透に。見れば忝なや。げにも社壇の有りけるぞ」と。又松明にて之を示し。ワキも同じく之を認むる處。一曲中の骨髓ともいひつべき要所なり。「馬上に折り殘す。江北の柳陰の。糸もてつなぐ駒」と。シテはくつらぎて松明を捨て。傘をたゝみて後見に渡し。眞中に出でゝ座す。ワキは神前に向ひて合掌す。

一首を詠じ出だす

是より社壇に昇りてシテと談話する躰なり。

それよりシテは。御身は如何なる人ぞと問ひ。ワキは紀貫之なりと答へ。貫之ならば歌をよみて神に謝せよといはれ。謙遜しつゝ遂に一首の歌を案じ出だして。「天雲の立ち重なれる夜半なれば。ありとほしとも思ふべきかは」と打ち吟ず。之を吟じ始むると。シテ段々と首を垂れ耳を傾けて聞き。同じ言葉を繰返し吟じ味ひて。「おもしろし〳〵」と面を上げ。いたく感ずる心あり。遂に「あら面白の御歌や」と。

馬ふたゝび歩む

まで稱贊し。歌道の講釋となりて古今集の序の意味など並べつゝ。歌の德を述べ。「などかは神も納受の。心に叶ふ宮人も」と。馬上に過ぎたる罪を神もゆるし給ふべき由を地に歌はせ。「かゝる寄特に逢坂の」をシテ歌ひ。「關の清水に影みゆる。月毛の其駒を」と。ワキ立ちて舞臺の先へ出で。兩手にて手綱取る形をなし。「引き立て見れば不思議やな」と。扇持ちたる右の手の方へ引き上ぐるやうにして。「もとの如くに歩みゆく」と正面に直し。「越鳥南枝に巣をかけ」と橋掛の方を見やり。「胡馬北風に嘶えたり」と正面を見。和らぐ神心。誰か神慮の感を仰がざるべきと下に居て拜をなす。神前に御禮を申し上ぐる心なり。此一段ワキの方に仕舞の有る處にて。其家にては尤も重き習とする能なりといふ。

祝詞を奉る

ワキはシテに宮人ならば祝詞を讀みて神に手向くべき由を賴み。シテは幣を持ち出てゝ祈念の詞を述べ。「神の岩戸の古の袖。思ひ出て

立廻り

られて」と。神樂の面影を見する心にて。立廻りと稱へ。鍾馗を二つばかり廻る形ありて。「今貫之が言葉の末」とワキに向ひ。「妙なる心を感ずる故に。かりに姿を見々ゆるぞとて」と。出で開きて始めて己は神ぞと名のり。別を告ぐる心を見せ。「鳥居の笠木に立ち隱れ」と。すら〳〵と橋掛へゆき。仕手柱を鳥居の心にて通り越し。幣を高く上げ後ろへ捨てゝ。「あれはそれかと見しまゝにて。かき消すやうに失せにけり」と早足にて幕に入る。「貫之も之を喜びの。名殘の神樂夜はあけて。旅立つ空に立ちかへる」と。ワキ留む。シテは影なく。ワキなほ鳥居の内にあり。雨はいつしか晴れて。月も朧に出でんする景色こそあれ。

キリ

ワキ留む

田村

前ツテ　地主權現に仕へ申すもの

悪童　黑頭　袴　水衣　腰帶　扇　幣

後ジテ　田村麿

平太　梨子打　鉢卷　黑垂　厚板　法被　半切　腰帶

太刀　扇

ワキ　旅僧

角帽子　鼠斗目　水衣　腰帶　數珠　扇

アヒ　里人

長袴上下　扇

京都清水の田村堂に祭らるゝ坂上田村麿の幽靈來り旅僧と物語し。更に甲冑帶劍の姿をあらはして鬼神退治の有樣を目前に學

能のしなり　一の卷

びて見するといふ事を。作れる能なり。勝修羅三番の隨一にて祝能の二番目に用ひらる。太皷なし。季節は春。花盛の頃。土地は清水觀音の境内。

ワキ出づ

次第にてワキ僧出て。仕手柱越しいつもの處にて。「鄙の都路へだて來て。九重の春に急がん」を歌ひ。地取すみて。東國方の僧なるが都見物に來れるよしの名乘あり。「頃も早彌生半の空なれば」の道行を歌ひ。着ゼリフを述べて脇座にゆき下に居ると。笛ヒシギありて一聲となる。

シテの一聲

シテは童子の姿にて萩にて作れる箒を提げ。出て〻舞臺に入り。「おのづから春の手向となりにけり。地主權現の花ざかり」と歌ひ。花に寄せて佛德を述べ。又見渡す花盛の景色を歌ひて。箒取る事も暫く忘れ。ながめ入りたる体にて立ち居たるに。ワキ尋ぬべき事ありと詞を掛く。シテ此方の事なるかと振り向く。ワキ美しき玉箒を持ち

ワキ問を掛く

來歷をかたる

て木蔭を清め給ふは花守なるかと問ひ。シテ是は地主權現に仕ふる者なりと答へ。ワキ當寺の御來歷を語り給へと請ひ。シテ諾なひて。「そも〳〵當寺清水寺と申すは。大同二年の御草創。坂上の田村麿の御願なり。むかし大和の國小島寺といふ所に。顯眞といへる沙門。正身の觀世音を拜まんと誓ひしに。ある時木津河の川上より金色の光さしゝを。尋ね登つて見れば一人の老翁あり。かの翁かたつて曰く。我は是れ行叡居士といへり、汝一人の檀那を待ち。大伽藍を建立すべしとて。東をさして飛び去りぬ。去れば行叡居士といつば是れ觀音薩埵の御再誕。また檀那を待てと有りしは。是れ坂上の田村麿」と語り。初同になりて出て開き。左へ廻りてワキへ向くは。猶物語の餘情にて。外の能にも例多し。此の謠の内「大悲の影ぞ有難き」と。正面へ箒持たぬ方の片手にて合掌する形は。梅若實の田村にて。（尤も何か習の小書ある時）よく見る處なれど。他の人のしたるのは未だ

見ず。

名所教へ

初同の留にシテはくつろぎ箒を捨てゝ扇を持ち。又もとの處に立つと。ワキは興に乘じて見え渡りたる名所々々を問ひ。シテは歌の中山清閑寺までも見えたりと教へ。入相の鐘ゆる處は慈尼寺なりと教へ。ふと月の出でたるを見あげて。朧なる影の花にほふ景色を賞概し。名所よりも何よりも。まづ〳〵是こそ御覽じ事なれとワキを誘引ふ。何等の風致ぞ。處は清水。時は春。材料すでに豐かなる趣向を。この優美艶麗なる文句にあらはして。天下に二つとなき太夫に演じ出だしめなば。濁世の忘念をも忘るゝばかりの面白さ。げに此上やあるべき。

二人同吟

こゝに於てワキも春の一時の惜しむべきを歌ひ。シテも「げに惜しむべし」と繰り返し。つひに二人して。「春宵一刻値千金。花に清香月に陰」といふ詩を同吟す。これにても猶堪へられずして。「あら〳〵面白の地主の花のけしきや」と。シテはワキの袖をとらへ。二三足さきへ誘引ひ出だして。角柱の方に花の木の間の月をながめ渡し。シテは右に廻り正面むきてクセとなる。此處「さくらの木の間に漏る月の」とシテは左へ廻り。扇ひらき左に持ちて。「雪も降る夜嵐の」と。正面の方へつか〳〵と出て。ほろ〳〵と散りくる花を扇の上に受け留むる形をなすもあり。

クセ

クセは舞グセにて。別に是といふ手もなけれど。「のどけき影は有明の」と。黒頭の毛を左の手にて取り見あぐる心にて。「天も花に酔へりや」と拍子ふみ。「おもしろの春べや」と左右して。返しにワキへ向ひ座す。春風なほ其あたりに落花を吹き散らし居る心地せり。

中入

打切ありてロンギとなり。「おぼつかなくも思ひ給はゞ。我ゆく方を見よやとて」とシテは立ちて橋掛の方へゆき。「田村堂の軒もるや。月の村戸を押し明けて」と。扇にて扉を開く形をなし。「内陣に入らせ給

田村

ひけり」と。中入して幕に入る。

アヒ

アヒ出て、清水寺門前に住む者ある由を名乗り。今日は御寺に参り地主の花をもながめんと存ずるといひて。ワキ僧の居るを見つけ。何方よりの御参詣ぞと問ひ。東國のものなるを答へ。つひに所望せられて田村麿の當寺建立の物語をするなり。たゞ座して語るのみなれば。語問とも居語ともいふ。兼平なども同じ事なり。

特殊

後シテの出

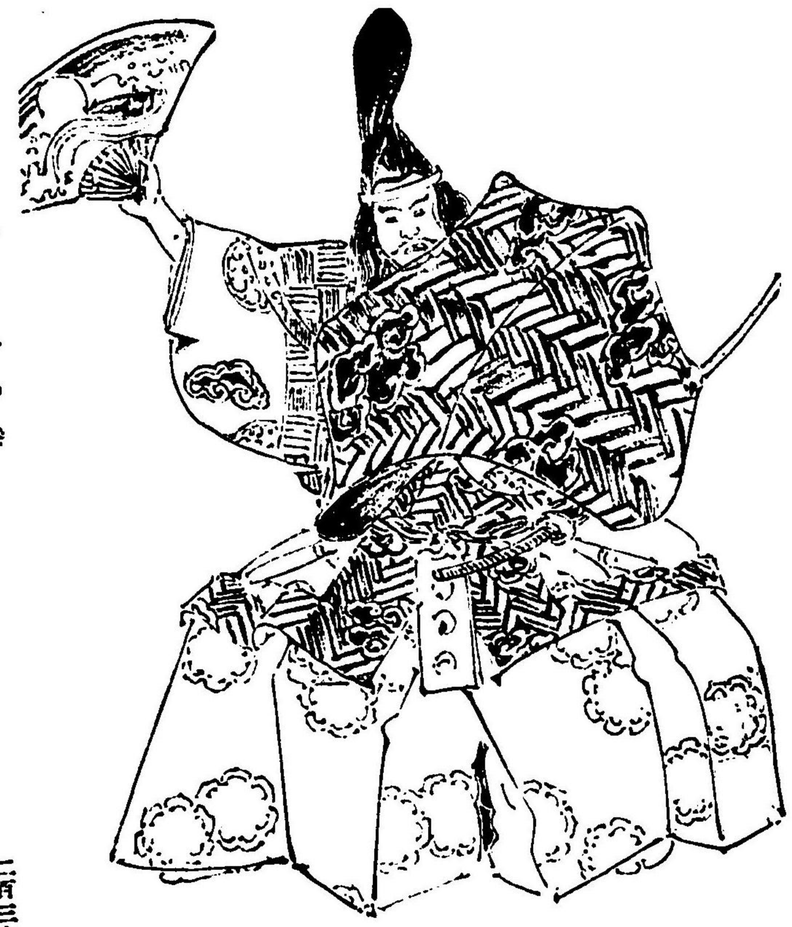
アヒ去りて「夜もすがら散るや櫻の陰にねて」の待謠となり。謠すみて一聲あり。シテ出て來る。田村麿鬼神退治の時の姿にて。平太面に梨子打烏帽子。半切に法被の右の肩を脱ぎ太刀を帶びたり。「あら有難の御經やな」の謠ありて。ワキ如何なる人ぞと問ひ。シテ坂上の田村麿なりと答へ。それより東夷を平らげたるも全く觀音の佛力なりとて。征夷の勅を奉じたる時まづ此佛前に祈念せし事を述べ。強吟のクセありて其征伐にゆく道の事を語る。尤も前の地の文句にて舞臺の眞中にゆき。床几に掛り居るなり。

後のクセ

クセの内には。逢坂の關を越え。粟津の森を過ぐる文句ありて。「石山寺を伏し拜み」と右の方受けて合掌し。「勢田の長橋ふみならし」とトントンと拍子三つ踏み。「駒も足並や勇むらん」と。馬の首の處を見て乘りたる心をあらはし。「すでに伊勢路の山近く」と。シテ歌ひて。「弓馬の道も先かけんと」。地に渡し。「花も紅葉も色めきて」と床几を離れて正面へ開き。拍子など踏みて心の勇み立樣をあらはし。「鈴鹿の山の地名を聞かせて。其地に着きたみそぎせし世々までも」と。正面の方へ進み出るを知らせ。「さる程に山河を動かす鬼神の聲」と。正面の方へ進み出て、敵に向ふ趣あり。「天に響き地に滿ちて」と上下に面を使ひ。さながら萬木青山動搖せる響きを。シテ一人にて代表せり。是よりカケリとなりて。合戰の模樣を見せ。脇正面の方に敵兵の大勢むらがり

カケリ

居るを認めたる心にて。「如何に鬼神もたしかに聞け」と呼ばゝり。天罰にて亡び失すべきよしを言ひ聞かせ。「ふりさけ見れば伊勢の海」と拍子踏みて。「あの〻松原むらだち來つて」と鬼神の寄せくるを見わたす心にて指して廻り。「數千騎に身を變じて。山の如くに見えたる處に」と。雲の扇して山の如くといふ文句を聞かせ。「あれを見よ不思議やな」とシテ歌ひて正面に向き。「味方の軍兵の旗の上に千手觀音の」と。又仰ぎ見る心にて指して廻り。「光を放つて」と扇と袖と刎ねて文句の心を見せ。「虛空に飛行し」と拍子ふみて。「大悲の弓には智惠の矢をはめて」と。扇を左に取り右の肩に當て。「一たび放せば」と。矢の心にて扇を刎ねながら正面へ走り出で。「雨霰と降りかゝつて」と。面つかひて千の矢先の飛び來るを思はせ。「鬼神の上に亂れ落つれば」と。跡に下り扇を頭にかつぎて。敵の矢先にかゝり斃るゝ有樣を學び。「鬼神は殘らず討たれにけり」と拍子一つ踏みて。凱旋の心をあらはし。「有



難し〳〵や」と直に佛前に感謝の合掌を爲し。同時に拍子ふみて歡喜の心を表し。跡は何の能にも有る如く。角取りて廻り。指して小廻りし。袖返し拍子ふみて「觀音の佛力なり」と舞ひ納む。いかにも勝修羅の名に背かず。勇ましく目出度きものなり。右の「有難し〳〵や」の處は。下に居て拜をなす形をも梅若にては見たり。

田村の替の形には白式とて後ジテが白裝束になる事もあり。長胡床とてキリの半まで床几のまゝにて形をなし。「一たび放せば千の矢先」と扇を刎ねる處より立つもあり。

江口

前ジテ　里女　　作物　船屋形附

若女又は增　葛　葛帶　箔　唐織

後ジテ　江口の君　　面前に同じ　箔　唐織坪折　緋大口　腰帶　扇

ツレ二人　侍女　　女面　唐織　一人は棹

ワキ　旅僧　　角帽子　袈斗日　水衣　大口　腰帶　扇

アヒ　里人　　長袴上下　扇

一僧あり。攝津の天王寺に參詣せんとて江口の里を過ぎ。むかし西行法師の此處にて宿を借らんとせしに。あるじの心なくして許さねばよみたりと言ひ傳ふる和歌を口ずさみしに。一人の女いできたりて。何とて其歌を吟じ給ふぞと問ひ。さま〳〵の

能のしなり　一の卷

問答をなして。實は其時の江口の君の幽靈なりといひすてゝ消えゆきしが。再び顯はれて其全盛の頃の舟遊のさまなどを見せ。遂に此世に出てたるは教化のため。實は普賢菩薩なりとて。白象に乘り西の方に行き給ふといふ筋を。作れる能なり。優美上品を主とする能にて。葛物の内にも重々しきものとし。三番目の外には用ひず。ワキも下り僧と稱へて京都より下れる智識なれば大口をはき。シテの位に準じて重役とせり。太鼓なし。季節は夏。土地は津の國江口の里。

ワキ出づ

次第にてワキ出て。「月は昔の友ならば」を歌ふ。例の如し。「是は諸國一見の僧にて候」の名乘。「都をばまだ夜深きに旅立ちて」の道行ありて。「江口の里に着きにけり」が濟むと。アヒを呼び出だし。「江口の長の舊跡を教へて給はれといふ。アヒ「すなはちあれなるが江口の長の舊跡にて候」と教へ。「又御用の事あらば仰せられ候へ」といひて退くと。ワキは正面むきて。「さては是なるは江口の君の舊跡かや」と歌ひて。其跡を吊らひ。思ひ出てられたるまゝに。「げにや西行法師此ところにて。一夜の宿をかりけるに。あるじの心なかりしかば。世の中を厭ふ事こそ固からめ。假の宿りを惜しむ君かなと詠じけんも。此所にての事なるべし。あら痛はしや候」と獨ごちゐたるに。「なふ〳〵あれなる御僧」と呼び掛けて。唐織姿なる美人のシテは出て來り。「今の歌をば何と思ひよりて口ずさび給ひ候ぞ」と問ふ。問はれてワキは不審に思ひ。「そも何故に問はせ給ふぞ」と問ひ返す。シテは答へて。「假の宿りを惜しむとの。其言の葉も耻かしければ。さのみは惜しみ參らせざりし。その理りをも申さんために。是まであらはれ出てたるなり」といひ。ワキは猶もいぶかりて。「さのみは惜しまざりにしと。ことわり給ふ御身はさて。いかなる人にてましますぞ」といひ。シテ其答をば爲さて。「いやされば」こそ惜しまぬ由の御返事を。申しゝ歌を

シテの呼掛

中入アヒ

ば何とてか。詠じもせさせ給はざるらん」といひ。さま〳〵の問答ありて後初同となる。「をしむこそ。惜しまぬ假の宿なるを。〳〵。などや惜しむと夕波の。かへらぬ古へは今とても。捨人の世がたりに。心な留め給ひそ」趣味あふるゝ如し。

ロンギは夕暮のこる花の梢に鶯の歌ひかはすが如く。みやびやかなる内にしめやかなる心あり。「たそかれにたゝずむ影はほの〳〵と。見えがくれなる河隈に。江口の流れの。君とや見えん耻かしや」と。遂に名をあらはして餘情を殘し。靜に立ちて中入せり。

こゝに前のアヒいでゝ。「最前往來の人の。江口の長の舊蹟を御尋にて候間。教へ申して候。未だあれに御座あるか見舞申さばやと存ずる」といひてワキの僧を見つけ。「最前の御僧は未だ是に御座候よ」といひて前にゆくと。ツキは江口の君の御事を語つて聞かされよと所望す。例の如く扇を持ち正面むきて。

さる程に江口の長と申したる御方は。本國は周防の國。中の御手洗。江の里と申す所の御方にて候が。都近く此所に御座あるべきとて。是にて流れを立て給ひたると申す。然れども正身の普賢菩薩にて御座ありたると承り及びて候。其子細は。播州書寫の開山。性空上人とて御座ありたるが。正身の普賢菩薩を拜みたきと思召し。觀音へ此事祈誓なさるゝ所に。ある夜の御靈夢に。正身の普賢菩薩を拜みたきと思召さば。津の國江口の長を御覽ぜと。あらたに靈夢を蒙り給ひ。上人この所へ御出なされ。江口の長に御對面ありたきと思召す所に。長は十人の女房達を連れ。船遊をなされて御座あるを。上人御覽じければ。其時遊女の歌に。げにやさは。澤邊の水に音づれて。さゝら波立つやれことんどふと歌ひ給ふ。上人きどくに思召し。閉目そくじつあつて御覽じければ。長は普賢菩

薩とあらはれ。十人の女房達は。十羅刹女とあらはれ給ふ。上人不思議に思召し。開目そつけんあつて御覽じければ。江口の長にて御座ある間。さては江口の長は疑ふ所もなき。正眞の普賢菩薩の再誕にてあるよとて。上人は日頃の念願かなひ。普賢菩薩を拜み申したる事の嬉しさよと。禮をなし御よろこび有りたると承り及びて候。

と物がたる。謠の文句以外の事をいふは重複せずして宜しきなり。終りてワキも先程の不思議を語り。狂言は暫く御逗留あつて重ねて奇特を御覽あれ。などゝ述べて引く。

ワキ「さては江口の君の幽靈かりに顯はれ。我に言葉をかはしけるぞや。いざ吊らひて浮めん」と。いひもあへぬ内に。月すみ渡る川の面には。遊女の歌ひつれて舟遊する有樣見ゆるよしの待謠ありて。アシラヒ鼓となり。屋形附きたる船の作物脇正面の方へ出づる。

待謠

舟出づ

シテ出づ

それより一聲になりて。ツレ女。シテ。ツレ女と三人出て來り。前のツレは舳先に。シテは胴の間に。跡のツレは艫の方に乘りて棹持つ。打切ありて地より謠ひ出す。「河船を留めて逢瀨の波枕。浮世の夢を見ならはしの。驚かぬ身のはかなさよ」など。遊女の身の上を述懷しつゝ舟歌うたひくる有樣なり。「よしや吉野の花も雪も雲も波も。あはれ世に逢はじやと謠すみて。ワキ聲を掛けて。「そも誰人の舟やらん」と問ふ。「恥かしながら古の。江口の君の川逍遙の。月の夜船を御覽ぜよ」と答ふ。ワキ「そもや江口の遊女とは。それは去りにし古への。」シテ「いや古とは。御覽ぜよ月は昔にかはらめや。」ツレ二人にて「我等もかやうに見え來るを。古人とはうつゝなや。」シテ「よし〳〵何かと宣ふとも。」ツレ二人「いはじや聞かじ。」シテ「むつかしや。」などの問答ありて。「月も影さすと水の上を見わたし。「うたへやうたへうたかたの」と。シテは左の手にて跡のツレを指し。扇にて前のツレを指し。

江口

共に歌ふべしとの心を示す。面白き處なり。「今も遊女の船あそび」と、シテもツレも段々に船より下り。シテは眞中にゆきて床几に掛り。ツレ二人は地謠座の前に下に居る。後見こゝにて舟を引く。

船を引く

クセ

クリよりサシの間は別に形もなく。「前の世の報いまて。思ひやるこそ悲しけれ」と。面曇らしてしをるもあり。打切よりクセとなり。シテは床几を離れて舞ふ。「翠帳紅閨に。枕をならべし妹背も」と頭を指し。「いつの間にかは隔つらん」と拍子ふみ。「およそ心なき」より角取りまはりて。例の如く左右上扇をなし。「げにや皆人は」と指し廻して諸人のさまを見わたし。「見る事聞く事に迷ふ心なるべし」と。かざし廻りて左右しゥきへ向きて留むる。すべて迷を去り悟を得せしむる意味の文句なれば。シテの舞ふ心持も左樣ならざるべからず。

序の舞

「おもしろや」の謠にて五段の序の舞となる。迷の雲晴れて樂しき心なるべし。舞の上りは「實相無漏の大海に」の和歌にて。大左右打込ヒラキなど例の如くありて。「待つ暮もなく」と指して角へゆき。「別路も嵐ふく」と。嵐に心を附けて上を見。「花よ紅葉よ」と指し分けて廻り。「あらよしなや」と後悔の心にて扇打ち合はせ面伏せ。「おもへば假の宿に」と。悟りたる心にて面上げ。其返しに拍子ふみ。「心とむなと人をだに。諫めし我なり」と。ワキへ向き告ぐる心にて開き。「是までなりや」と辭儀する心にて面伏せ。「即ち普賢菩薩とあらはれ」と。其身より赫奕たる光明を放つ心にてイウタン扇をなし。「船は白象となりつゝ」と。正面の方に船のある心にて低く指し。「白雲に打ち乗りて」と乗り込み。例の如く開き右受け拍子ふみて留むるなり。頗る靜なる能なれば。素人は眠氣を催しもすべし。されども中々趣のある能なる事は。味ひて後に知られなん。

仕の形

特の習には平調返。干之掛。彩色之傳などいふものあり。

百萬

シテ　百萬
深井又は曲見　葛　葛帶　前折烏帽子　袴　長絹
腰帶　扇　笹
子方　其子
袴　長袴の下　扇
ワキ　僧
角帽子　壁斗目　水衣　扇　數珠
アヒ　門前の人
狂言上下　扇

奈良の都に百萬といへる女あり。愛兒の行方を失ひ。悲しみの餘り發狂して家を出て。京都に來りて嵯峨の釋迦堂に詣でしが。

ワキの次第
アヒ

折しも大念佛の日にあひたれば。群集の中に我子やあると尋ね狂ひし末。遂にめぐりあひて喜び伴なひ歸る事を作れり。狂女物の一つにて多く四番目に用ふ。太鼓あり。季節は春三月。櫻のさかり。土地は右にいへる京都の釋迦堂。

次第にて子方を先に立たせワキと出て。「竹馬にいざや法の道。〳〵。まことの友を尋ねん」と歌ひ。是は和州三吉野の者なるが。南都西大寺のあたりにて拾ひたる幼子を伴なひ。嵯峨の大念佛に參らばやと存ずる由の名乘ありて。釋迦堂の門前の男を呼び出だし。何か面白き事あらば此幼き者に見せてくれよといふ。男は狂言の役なるが。即ち答へて。「今程は何にても面白き事は御座なく候さりながら。こゝに百萬と申して女物狂の候が。念佛を申し候へば。罷り出て面白く狂ひ申され候程に。是を招き出だし御目に懸け申さうずる間。まづかう〳〵御通り候へ。」といひて釋迦堂に伴なひゆき。「南無釋迦牟

能のしなり　一の卷

シテ出つ

尼佛。なむ釋迦々々々々々」と歌ひ。地にても「なむ釋迦々々々々」と歌ひ。扇を前に出だし顔かくすやうにして。踊ぶしになり。「さあみさみさ」と歌ひつゝ踊りゐる處に。長絹に前折烏帽子を着し。笹を持ちたるシテ出て來り。踊りゐる狂女の肩を笹にて打つと。打たれたる狂女は驚き。「蜂が刺いた」というて跡に下る。寶生流にては笹にて打つ事。この百萬には

無くして。三井寺の能にあり。シテは狂言に向ひ。「あらわるの念佛の拍子や候。わらは音頭を取り候べし」と。狂氣じみたる事をいふと。「我等は下手にて候。さあらば音頭を取り

て御申し候へや」というて狂言は退く。

シテの念佛

それよりシテは正面に向ひ。「南無阿彌陀佛」と歌ひ。地また「南無阿彌陀佛」と歌ひ。シテ又くりかへし。ワキ又くりかへし。シテ「彌陀たのむ。」地「人は雨夜の月なれや。雲晴れねども西へ行く」と。橋掛の方に傾く月を見る心あり。「力車に七車」と。笹を上げて舞臺の先に出て。「つむとも盡きじ」と車に物を積む形をなし。「おもくとも。引けやえいさらえいさと」と。車を引く形をして跡に下り。「一度に頼む彌陀の力」と。さして其力に依頼する心に廻り。左右して留むる。以上を車の段と名づく。太鼓は此車の段の間のみ加はるなり。

車の段

打切ありて謠の調子一變し。「げにや世々ごとの。親子の道にまとはりて」と据拍子ふみ。「朧月の薄曇」と霞める月をながむる心にて空を見。「なほ三界の首かせかや」と。笹を襟の處に掛け左の手も添へて首かせの形をなし。「牛の車のとことはに」と拍子ふむ。此ところ下手の太夫がしたりし時。兩手別々になりて牛の角のやうに見えたるを。いかに物眞似する能なりとて牛の角の眞似までは餘り俗なりと。批評せし人ありしが。それは角にはあらず。首かせかやの心を知らざりしよりの誤解にて。評者の無理なり。能の素人評には兎角かゝる誤謬の見出ださるゝ事こそ多けれ。

かくてまた「えいさらえいさ」と車引く形ありて。「引けや〳〵此車」と前の方に車の有る心にて指し。「げに百萬が姿は」と。みづからの風躰をいふ文句となり。「もとより長き黒髪を。」「おどろの如く亂して。」には形なけれども。「ふりたる烏帽子引きかづき」と。笹を上げてわが着せる烏帽子を指す形あり。「又眉根ぐろき亂黑」には形なくして。「うつし心か村烏」と。角の方に烏の飛ぶを見る形するもあれど。是は「うかれと」の村詞に留きたるのみなれば。ちと仕すぎて下品なる心地せらるゝは如何。「うかれと人は添ひもせて」と泣くはさもあるべし。「肩を結

んて裾に下げ」と。文句に心附けさするやうに笹を上げ前に出でゝおろし。「裾をむすびて肩に掛け」と。笹を右の肩にかたげ。「みだれ心なから南無釋迦彌陀佛と」と。拍子ふみ舞臺の先に出でゝ。「信心を致すも我子にあはんためなり」と。合掌して。更に「なむや大聖釋迦如來。狂氣をもとゞめ。安穩に守らせ給ひ候へ」と歌ひ。立ちて仕手柱の方にくつろぐ。右の「げにや世々ごとの」より「あはんためなり」までの間を笹の段といへり。笹にて狂ふ心なり。

くつろぐ間に子方とワキと問答あり。子方はかの物狂を故郷の母と認めて其名を問うて給はれといひ。ワキはやがて問うて參らせんと答へ。シテに向ひて。「いかに是なる狂女。お事の國里は何くの者ぞ」と問ふ。シテは奈良の都の者なるよしを答へ。ワキ又何故に狂人になりたるぞと問ひ。シテ又夫には死別し。一人の愛兒には生別せし故に思が亂れたりと答へ。さて今も子といふものゝあらば嬉しかるべきかと問ひ。それは仰までもなく。我子にめぐりあはんが爲にてこそ。耻をも忍びて諸人の前に念佛申す由を答へ。まことと信心さへせば。群集の中にて逢ふ事もあらんと慰め。さらば愈よ信心を凝らして。法樂の舞を舞はんと述べ。「もゝやよろづの舞の袖」より舞曲の文句の心にて。「我子のゆくへ祈るなり」とイロへになる。法樂之舞などいふ時には。こゝに中之舞の入る事もあり。

イロハ

クセは舞クセにて。我身の素性を始とし。奈良を出てゝ京都に來れるまでの道のさま。および嵯峨に來りてからの見わたす景色。またこの寺の本尊の謂れなどを述べて。つひには我子に逢はして給はれと祈る心をあらはしたる文句なれど。是も能の上よりいへば舞曲中の唱歌なり。花の頃といひ。名所といひ。おのづから心浮き立つ内にも。あはれと思はるゝは此クセなり。

クセ

まづ「西の大寺の柳陰。緣子のゆくへ白露の。おきわかれて何ちとも

知らず失せにけり」と。愛子の行方を失ひたる文句ありて。「奈良の都を立ち出てゝ」と。仕手柱の方より脇柱の方へ行き。「かへり三笠山」と仕手柱の方を向き。三笠山を見上げながら開きて。「佐保の川を打ちわたりて」と二三足出て。川を渡る心にて下に心を附け。此處下の方を川の心にて指し廻す人もあり。「山城に井手の里」と進みゆきて。「影うつす面影」と舞臺の先に出でゝ下を見。「あさましき姿なりけり」と跡に下りて面曇らし。「かくて月日を送る身の。羊の歩み隙の駒」と。角取りまはりて。「嵯峨野の寺に參りて。四方のけしきをながむれば」と左右し上扇となり。「花の浮木の亀山や」と扇のけて開くなど。何の能にも有る手なれど。こゝは殊に戸など開きてながめわたすやうに思はれて感深く。「雲にながるゝ大井川」と拍子あり。「嵐の風松の尾」と指し廻してこゝかしこと見わたす心あり。「立ちこそ續け小忌の袖」と角へ指しゆき。「かざしぞ多き花衣」とかざして廻り。「貴賤群集する」と指し

二段グセ

立廻り

て諸人の集まれるを見まはし。「此寺の法ぞ尊き」と胸ざしゝて正面に此寺を敬へ。「毘首羯磨が作りし」と拍子ふみ。「赤栴檀の尊容」と正面に本尊を見込み。「かたじけなくも此寺に現じ給へり」と左右して又上となる。斯くの如く長きクセにて上の二つある者を二段グセといふ。「安居の御法と申すは」と拍子ふみて。例の如く大左右打込ヒラキあり。「子を恨み身をかこち」と指し分けて角へゆき。「親子あうむの袖なれや」とかざし廻りて。「百萬が舞を見たまへ」とワキに向ひて留め。舞の間は忘れて居たりし我子の事が急に悲しくなりて。「あら我子戀しや」と打ち泣き。笛のアシラヒにて立廻りあり。立廻りといへば芝居などに馴れたる人は。喧嘩つかみあひても始まるかと思ふべけれど左にあらず。我子を群集の中に搜し歩く心にてあはれなる所なり。まづ目附柱の方より脇座へ行き。又大小前より脇正面の方へ尋ねゆくもあり。或は橋掛にゆきて舞臺に立ちもどるもあり。搜しても〳〵搜

ワキは其子のあるよしを告ぐ

し得ざる心にて。しを〳〵としつゝ「是ほど多き人の中に。などや我子のなきやらん」と歌ひ。情せまりて又狂亂の有樣となり。「わンが子たべなふ南無釋迦牟尼佛と」と合掌し。謠も乘り形もすゝみて。「心ならずも逆緣ながら。暫にあはせてたび給へ」と。平伏して打ちしをる。見る人も涙うかむる處なるべし。

ワキ　此に於て「あまりに見るも痛はしや。是こそお事の尋ぬる子よ。よく〳〵よりて見給へとよ」と。その實を明かし。シテは斯くと聞きて。「心づよやとくにも名のり給ふならば。かほどに耻をばさらさじものを。あら恨めし」と。恨めしげに力を入れてワキを見やりしが。忽に氣をかへて。「とは思へども。たま〳〵逢ふは優曇花の」と立ちて。扇にて招きながら子方の方へ行き。「夢かうつゝか幻か」と嬉し泣きに打ち泣く。上手の太夫にさせたらば見る人も。其境に臨むが如く。喜び極まりて却りて今しも狂せんとしつべきか。

キリ

狂女さま〳〵あり

「よく〳〵物を案ずるに」とイウクン扇して。心中に感謝の念の深き心をあらはし。「かの御本尊はもとよりも」と子方を見て。御身のための父なりとの心を見せ。「衆生のための父なれば」と諸人を見わたす心にて指し廻し。「母もろともにめぐりあふ」と。子方を同道して歸る心にて仕手柱まで伴なひゆき。子方は歩みて樂屋に入り。シテは殘りて扇をかざしつゝ廻り。「都にかへる嬉しさよ」と歡喜の心もて舞ひ納め。拍子聲たゑて靜々と橋掛をゆく。嵐をさまりて落花なほ水に浮びゆくの趣あり。

そも〳〵かゝる狂女の事を仕組める能は。能の中にも殊に興味ふかく。能の特色ともいふべきものにて。觀世々阿彌のしるせる花傳書に曰く。物狂この道の第一の面白き藝能なり。物ぐるひの品々おほければ。此一道を得たる人達者は十方へわたるべし。くりかへしくりかへし考案の入るべき嗜みなり。たとへばつき物の品々。神佛の

とがめ。生靈死靈などは。そのつきものゝ躰を學べば便りあるべし。親子の別れ。子を尋ね。男に捨てられ。妻におくるゝ。かやうの思に狂人する物ぐるひ。一大事なり。かやうの思のシテも。心にかけずして唯一ぺんにはたらく程に。見る人の感もなし。思ゆゑの物狂をば。いかにも〳〵物おもふ氣色を本意にあてゝ。狂ふ所を花にあてゝ。心に入りて狂へば。其感ありて見どころ定まつて有るべきなり。かやうなる手がらにて。あはれなる所あらば。無極の上手と知るべし。これをよく〳〵思ひ分くべし。

およそ物狂の出立。似合ひたるやうに出て立つべき事ぜひなし。さりながら物狂に事よせて。時によりて何とも花やかに出て立つべし。時の花をかざしさすべし。

又いふ。物まねなれども心得べき事あり。物狂はつきものゝ本意を狂ふといへども。女物狂などの。或はしせうたうしやう鬼神などのつく事。何よりもわろき事なり。つきものゝ本意をせんとて女姿に怒りぬれば。見所似合はず。女がゝりを本にすればつきものゝ道理なし。又男物狂に女などのよらん事も同じ料簡なるべし。云々。ひた面の物狂。能を極め習ひては十分にあるまじきなり。顔色をそれそれになさねば物狂にすゑたる所なくて。顔氣色をかゆれば見られぬ所あり。物真似奥儀ども申し盡しがたし。大事の中樂などには。初心の人は酌酌すべし。ひた面の一大事。物狂の一大事。二色を一つになして面白き所の花にあてん事。いかほどの大事ぞやよく〳〵稽古あるべし。と。

以上花傳書にいへる處なり。此心して能を見たらば。太夫の苦心も多少は味ひ知られなんものぞ。

猩々

シテ　猩々
猩々面　赤頭　若附髭　唐織坪折　色大口　腰帯　扇
ワキ　こうふう
厚板　大口　側次　腰帯　扇

唐土にて楊子の里といへる處に住める孝子あり。市に出て〻酒を賣るをもてなりはひとせしが。市毎に來りて酒を飲めども面色は更にかはらぬ人あり。あまりの不思議さに名を尋ねたるに。海中に住む猩々なりといひしかば。今日も酒をたゝへて猩々を待つべきよしを獨語して待ちゐたるに。折しも月のおもしろきに現れ來りて。めでたく酒を飲み遊び。その孝心にめで〻盡せぬ酒の泉を授くるよしの筋を作れる能なり。孝子のいはれといひ。盡せぬ酒の泉といひ。めでたき能がらなれば多くはキリの祝言に用ひらる。十二月の能納にする謂はれは。猩々の秘曲に亂といふがあれば。治に亂を忘れざるの意味にて。德川時代に定められたる習はしなりとぞ。太皷あり。季節は秋にて菊の時節。土地はもろこし潯陽の江。

ワキの名乘
待謠
下羽

名乘笛にて厚板大口に側次(亂の時は法被)の唐人姿なるワキ出て〻。「是はもろこし金きんざんの麓。楊子の里にこうふうと申す民にて候」の名乘あり。我身の素性を述ぶる詞かず〳〵ありて。待謠となる。「潯陽の江のほとりにて。〳〵。菊をたゝへて夜もすがら。月の前にも友まつや。又かたぶくる盃の。影をたゝへて待ちゐたり。〳〵。」此文句の終りに渡拍子と稱ふる太皷の打出ありて下羽となる。下羽は他にも大瓶猩々西王母國栖嵐山などにありて。かく猩々や天人の如く。舞ひつゝ出て來るやうのものに用ふる囃子なり。

此のしをり　一の卷

シテ出づ

下羽二段とらせて猩々面に赤頭をかぶり。緋の着附に色大口(亂の時は半切)をはき。赤地唐織を坪折たるシテは幕を上げさせて出て來る。扇ひらきて持ちたるは舞ひつゝ來るの心ならん。舞臺に入りて左右すると。「老せぬや。薬の名をも菊の水」の謠あり。「みきと聞く」と上扇して左右打込ヒラキの形あり。「吹けども〳〵」と招扇しつゝ秋風の吹く心をあらはして角へ行き。それより左へ大きく廻りて。「まれ人も御覽ずらん」とワキへ向き。「月星は隈もなし」と。頭の毛を左の手に取りて面つかひつゝ見上げ。「猩々舞を舞はうよ〳〵」と仕手柱の方へ廻り行きて「蘆の葉の笛を吹き」と正面へ開き此ところ喜多流にては扇を口に當てゝ笛を吹く形あり。「波の皷どうと打ち」と扇打合して拍子ふむ。打合は皷打つ心にて拍子は其音をあらはす意味なれど。波の上にて踏むなれば音せぬやうに躍つくるが習なりといふ。

破掛り中の舞

「聲すみわたる浦風の」と開きて。「秋の調べや殘るらんと右に廻り。破

能のしなり　一の卷

掛の中の舞となる。破掛とはオヘイ。オヘイレイ。オヘイヒウイヒヨウリウリイといふ笛の譜にて掛かる常の中の舞にて。他のイロヘ掛りなどいふ物と區別していふなり。

舞の上りはワキに向ひ。「有難や御身心すなほなるにより。此壺に泉をたゝへ。唯今かへし與ふるなり。よも盡きじ」と歌ひて地に流し。「萬代までの竹の葉の酒。汲めども盡きず」と。打込扇して酒を汲む形をなし。「のめどもかはらぬ秋の夜の盃」と扇左に取りて。盃の心に前へ出だし。「足もとはよろ〳〵と」と。たじ〳〵とよろめきたる体にて下り。「醉に伏したる枕の夢の」と。扇を枕のやうにして下にすわり。「さむると思ば」と立ちて廻り。「つきせぬ宿こそめてたけれ」と拍子ふみて舞ひ納む。此曲に種々の習ある事は左にしるすべし。

猩々に重き習事とする秘曲あり。これを亂と稱ふ。（丁寧にいへば猩々亂なれども。常に略して亂とのみいふ。）中の舞の處に醉

ひて亂れ戯むるゝ仕方をなしつゝ舞ふ曲あるをいへるなり。觀世流にては。足を上げつゝ波を蹴る形をして舞ふ。名づけて亂足といひ。波を蹴ては又爪立ちつゝ横に流れゆく處あり。名づけて流足といへり。かくてこの亂にも又種々の曲ありて一樣ならず。

破掛の亂といふは。中の舞の掛りありて初段目より亂となり。又亂の後にも直りと稱へて中の舞の後二段を舞ふあり。是は亂の内の普通なる形なり。

亂掛といふは中の舞の掛りなくして初より亂となるもの。亂留とは。後の二段なくして亂にて終るをいふ。

酒壺之傳の時には。酒壺の作物を正面先に出だして。柄杓にて之を汲む形をなす事なり。

雙之舞といふになると。ツレの猩々出てゝ先づ舞ひ。シテは「みたしのしなり」の卷

盃

きと聞く」と歌ひながら幕より出て丶。一の松にて床几に掛り居る。亂の舞になりて二段目よりシテも立ち。舞臺に入りて相舞となり。ツレはシテの壺の中のぞく形の處にて押しのけられ。下りて醉ひ伏したる樣に兩手つきて安座し。「有難や御身心すなほなるにより」は兩人して歌ひ。シテは扇を枕にして眠ると。ツレ立ちて舞ひ。「足もとはよろ〳〵と」と下りてシテの肩を叩き起すと。シテ又立ちて兩人にて舞ひ納むるなり。

いにし五月に梅若にて見たりし和合之舞は。是も二人にて。ツレ出て丶先づ舞ふ事雙之舞の如く。「盃も浮出て丶」とシテ幕より出て。「友にあふぞ嬉しき」と。シテは橋掛にて。ツレは舞臺にて互に向ひ合ひ。「みきと聞く」と兩人うたひながらシテは舞臺に入り。是より總べて相舞同吟にて。亂は破掛なりしが。置壺之傳なりしゆゑ。亂にかゝる時。柄杓とりてツレに酌をし。みづからも扇左にひろげ持ちて手酌する事あり。キリの「くめども盡きず」にも前の如く兩人くみて飲む事ありて。あとは善通の形を相舞にまひ。トメはツレ橋掛にて。シテは仕手柱にてイウケン扇して拍子ふみ。留めたり。

是等の外に半開口とてワキの秘事にする亂もあり。其時は脇能にする事なりといふ。

能の栞一の卷終

能のしをり壹の卷
定價金四拾錢

明治三十六年三月二十三日印刷
明治三十六年三月二十六日發行

著者　大和田建樹

發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎

印刷者　東京市京橋區四丁目新屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區四丁目新屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

版權所有

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

大和田建樹先生著　全部六册中判和装　毎編密圖挿入

能を舞ふ人はあれども能を知る人はあれども能を解する人は少なし此の書一度繙かば知る非も審かに解するとも迷かなるを得ん斯道の爲め舟筏とも燈火ともなるべきは獨り此の書か

第壹の卷

総説

能の種類、役者、地謠囃子分、舞謠と橋掛、形、位と緩急、中入と物着、次第、名乗笛、一聲、出力、早笛、大鼓、下羽、來序、亂序、あしらひ出し、早鼓、觀詞、舞、舞働、翔、祈、立廻、イロヘ、幕、裝束、作物、小道具、替の形、囃子と仕舞

○翁○高砂○八島○支兆○蘆刈○船弁慶○三輪○葵上○羽衣○安宅○安達ヶ原○巖通○田村○江口○百萬○猩々

第貳の卷

○竹生島○清經○熊野○隅田川○融○班女○鉢木○卷絹○俊寛○海人○小鍛冶○夜討曽我○杜若○花筐○鞍馬天狗

第三の卷

○養老○忠度○松風○七騎落○山姥○橋弁慶○春榮○道成寺○富士太鼓○土蜘蛛○四王寺○籠○草子洗○唐松○紅葉狩

第四の卷

○加茂○巴○三井寺○葵上○烏帽子折○小袖曽我○懸川○攝待○野守○花月○賀茂○益滿○放下僧○望月

第五の卷

○嵐山○龍盛○二人靜○雲雀山○殺生石○小督○頼政○井筒○熊坂○盛久○住吉詣○柏崎○經上○善知鳥○巫羽

第六の卷

○龍田○朝長○鉢○阿漕○善界○國栖○屋法師○大原御幸○蟬丸○船弁○大佛供養○班女○藤戸○大江山

正價

一册金四拾錢●三册前金壹圓拾五錢●全部六册金貳圓拾錢●郵税一册六錢宛

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

大和田建樹君編

日本歌謠類聚

上下二册脊皮金文字入中判洋装頗美本

紙數一册一千餘頁宛

正價一册六拾錢
郵税一册拾四錢

發兌元　博文館

目次

上代曲○大歌○童謠○雜曲

中世曲○神樂歌○催馬樂○風俗○今様○雜曲

近古曲○宴曲○謠曲○小歌○雜曲

近世曲○小唄（木手組、端手組、觀組、隆達節、弄齋節、歌、馬子歌、工那歌、船歌、流樂歌、觀那歌、踊歌、盆歌、子供歌、流行歌、雜歌）

▲附錄○十二段草子○道しるべ○絃歌糸のみさほ○謠文評釋

我國開闢以來二千五百年間の歌謠は載せて本書にあり、時を以て古今を分ち、種類に依て雅俗を別にし、一讀人をして昭々其沿革を詳にせしむ、大和田先生が之を輯むるに數星霜の間如何に勞苦を費されしかを見るべし

各宗本山名所圖會

石倉翠葉君著

本派本願寺名所圖會

全壹冊洋裝菊判美本
正價六拾錢郵稅拾錢

本書は眞宗本派の本山たる西本願寺創建の沿革より小は庭前一松の傳說に至る迄微細苟もせず歷史と實地に參照し極めて通俗に編述し且境內の建築物寶物古文書室內の裝飾庭園等に至る迄皆之を精巧緻密なる寫眞銅版及石版木版二百餘種を挿入したれば史家の好參考書たるは勿論吾信徒百萬の同胞が座右缺くべからざるの珍寶なり

大谷派本願寺名所圖會

全壹冊洋裝菊判美本
正價四拾錢郵稅六錢

東本願寺堂宇の莊嚴偉觀なるは天下皆之を知る本書は大谷地名考大谷廟所考眞宗の名義及沿革舊史に現れたる東本願寺法系門跡考門跡傳門跡の邪懷遂如上人の子守歌等を始めとし境內の沿革建築物及庭園の沿革寶物古文書本寺に附屬せる名勝舊蹟等其他一切を一々歷史と實地に考證探査し文は勉めて通俗に振假名を附し且つ精巧緻密なる寫眞石版木版數十種を挿入したれば一は旅行臥遊の好伴侶たらん一は史家の參考となり

佛光寺名所圖會

全壹冊洋裝菊判美本
正價廿五錢郵稅四錢

本書は眞宗佛光寺派の本山たる京都佛光寺の事蹟を一々現況と歷史に參照し極めて精密に考證記述したれば同寺の事蹟を知るは蓋し本書を措きて他に求むべからざるなり由來佛光寺は由緒正しき古刹にして卷頭に掲げたる御醍醐天の御綸旨及御宸翰後水尾天皇後西院天皇の御宸翰孝明天皇御寄附菊形香爐見眞大師自作の有範鄉及吉光尼の木像見眞大師眞筆嗣法相承の名號等其他諸寶物の寫眞銅版に由て知らるべきなり

名所圖會 博文館發兌

日光名所圖會

全壹冊洋裝菊判美本
正價六十五錢郵稅十二錢

官國幣社圖會

山紫水明にして殿堂の偉觀壯麗たる日光山の事蹟につき明細に記せるもの は實に汗牛充棟も啻ならずしかも時日の變遷は在來の史書を以て到底滿足するを得ず著者幾多の舊史漫筆と幕府の諸記錄に據りこれを現況に照し史的考證を試み且つ文中一々精巧美麗なる寫眞銅版木版二百餘種を挿入して通俗に記述せるもの是を本書と爲す苟も日光一山の事蹟と沿革を詳細に知らんと欲するものは宜しく本書を繙くべきなり

日蓮宗各本山名所圖會

全壹冊洋裝菊判美本
正價郵稅未定

著者は宗祖日蓮の垂跡の靈地として將た一宗の大本山として幾百萬の信徒が渴仰禮拜しつゝある久遠寺、蓮永寺、法華經寺、藥原寺、誕生寺、妙本寺、龍口寺、本門寺等を始め一宗に於て最も尊崇重視せらるゝ靈蹟地は皆親しく探見し大は各寺の由緒沿革より小は一片の墓標に至るまで一々舊史に考へ各寺の靈寶記錄に參照し記事は極めて平易明細に編述し添ふるに各寺院の重寶建築物室內の模樣風景等美麗なる寫眞銅版石版木版三百餘種を挿入したれば一は史家の參考とすべく信者の珍寶として座右缺く可らざる良書なり

續刊

善光寺名所圖會　永平寺名所圖會
高野山名所圖會　比叡山名所圖會
成田山名所圖會　淨土宗各本山名所圖會

故七段　小林鐵次郎君遺稿

全部拾二冊完成　碁・圍

第壹編　圍碁入門

故小林鐵次郎氏肯綮入

本書は第一に手段の何物たるを知らしめんが爲め術語と對照して最緊要なる手段を說明し次て其問題（詰碁）を設けて練習に供したり之れ入門の捷徑順序たるを以てなり

第貳編　圍碁初步

是より順次本論に入れり前編には極めて卑近なる術語を示すのみにて未だ全然に說き及ぼさず因りて今殼詰尙なる術語を解釋して首尾全からしめんを期せり總論には非技の心得を附せり

第參編　圍碁定石

定石を圍むことを得るに至れば最早其木道に歩を進めたるものなりされども邪路に踏入り其正式を誤まるもの多し兎に角此時の注意ぱ斯道の大切時期たり本編群に其法規を示して最も懇切を極む

第七編　互先定石集　上卷

定石は通常分ちて置碁定石、互先定石の二つあり第三編に示せしは置碁定石の一分のみ本編に於ては編錄利を爭ひ互に一步も讓らざるの手段を採るものなり其變化の赴く所闡るべからず玄愈々玄妙愈々妙、

第八編　互先定石集　中卷

本編には小目に於ける三間夾より一間夾高掛り二間高掛り大斜走掛并に大目に於ける全部を說示せり互先の妙所は愈よ本編に入りて自得する所多かるべし後編に進み所謂碁家の秘藏を茲に完修するを得べし

第九編　互先定石集　下卷

本編は目外に於ける高掛下掛及び小目掛四間折侵分岬體等を說示せり以上互先定石は故人小林鐵次郎（七段）故人杉山博雄（三段）兩氏の遺稿にして小林鐵太郎氏の秘藏に保れるものなり

發兌元　東京市日本橋區

男爵　初段　小林鐵太郎君編述

全書

正價◎一冊金壹圓六拾五錢◎二冊金壹圓六拾五錢◎六冊金八拾五錢◎郵稅一冊二錢

第四編　圍碁詰方

戰術と布陣法とは車の兩輪鳥の兩翼の如し此二者完歸して始めて碁に巧なるものといふべし而して此二者中初學は先つ戰術即ち詰方を修練すべきなり。本編初學者の爲に其捷徑を示さんと欲し生死斷續等の要道を說明せり

第五編　圍碁布石法

本編には井口、六口、四口、五先の布石法を悉示せり而して八口、七口、五口等は大同小異なるを以て之を略せり五先の石立は碁客の重視する所なるを以て編者特に深く注意し前半は古風の結を摘み後半は今代の粹を拔く。

第六編　評釋　古今名家打碁集

本編は年代順序にて本因坊歷代の系統并に國手の進歩變遷等を記せり是れ同家は世々碁名人の技倆ありしものにして其打碁は實に斯道の精華なるを以てなり題頭には補同對局者の出所經歷及物語等を畧記せり其參考に資する所甚多し

第十編　近古名人打碁集

本書は正保の昔より當政の末年に亘れる百五十餘年間に於ける名匠の打碁を撰擇し正しく年代を追ひ順序揭載せるものなり敍する所の棋譜は棋聖道策のもの最も多く元丈知得の對局之に次ぐ

第十一編　近世名人打碁集

本書は享和元年より安政年間に跨れる五十餘年間の名匠の打碁を撰擇し秩序的に年代を追ひ編纂したるものにして此時代ぱ斯道隆盛の時代にして其打碁又極めて多し其內百五十手以上の碁局ぱ百手毎に二個以上に分敍し以て研究に便せり

第十二編　今代名人打碁集

第十八世本因坊秀甫氏の青年時代より其後明治十九年に至る約三十年間の打碁五十二局を撰出して順記したるものにして其棋譜ぱ秀甫氏のものゼるもの最多し是れ同氏ぱ斯界の牛耳を執りし偉人にして其打碁ぱ今代碁界を代表したるものなればなり

博文館　本町三丁目

96
185

第八版

大和田建樹先生著

增補 謠曲通解

全壹册洋裝
脊皮金文字入
大判頗美本
紙數千八百頁

●正價金壹圓八拾錢　小包送り六百匁

其文は自然、其意は幽玄にして神韵の掬すべきは、謠曲にありとは大和田先生の持論なり。而して先生が謠曲文學の紹介者として、獨特の手腕を有せらるゝは、世人皆之を知れり。此書は現存の謠曲を悉皆網羅して、註釋を附し、妙處を示すと丁寧反覆、而して專ら通信を主とす、一讀以て神道佛法を學ぶべく、以て歷史故實を暗ずべく、以て詩歌文章を知るべく、名所舊跡を探るべし

大和田建樹先生著　彩色木版、寫眞銅版挿入

●第三版 謠と能

全一册洋裝大判　正價金貳拾五錢
紙數二百七拾餘頁　郵稅　六　錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

96
185

目次

竹生島……一
清經……一六
熊野……二七
隅田川……三九
融……五六
邯鄲……六八
鉢木……八二
卷絹……一〇八
俊寛……一一八
海人……一三〇
小鍛冶……一四三

目次

夜討曾我……一五二
杜若……一六九
花筐……一七五
鞍馬天狗……一八九

目次終

能の栞　二の卷

大和田建樹著

竹生島（ちくぶじま）

作物　舟宮

前ジテ　老翁
朝倉附又は三光附の類　附髪　熨斗目又は小格子
水衣・腰帯　扇　棹

前ヅレ　女
女面　葛　葛帯　唐織　扇

後ジテ　龍神
黒髪　赤頭　龍立　法被　半切　腰帯　扇　打杖
玉持つ

能のしをり　二の卷

後ツレ　天女
女面　黒垂　天冠　箱　長袴　大口　腰帯　扇

ワキ　官人
大臣烏帽子　狩衣　大口　腰帯　扇

ワキツレ（二人又は四人）　隨行者
ワキに同じ。

アヒ　能力
能力頭巾　狂言袴　脚半　扇

延喜の聖代に仕へ奉る臣下江州竹生島の明神に參詣し。辨財天と龍神との出現を拜する事を作れる能なり。神能の一にて太鼓あり。季節は春。

作物いづ

囃子方座につくと宮の作物に引廻かけたるを大小前に出だし一疊臺の上に置き。竹生島明神の社殿をあらはす。

ワキ出づ

次第にてワキとワキツレと出て。舞臺に立ちならびて「竹に生るゝ鶯の竹生島詣いそがん」を謠ふ。禮脇の時は三返がへしにする事など。高砂の處にいひたるが如し。

ワキの名乘

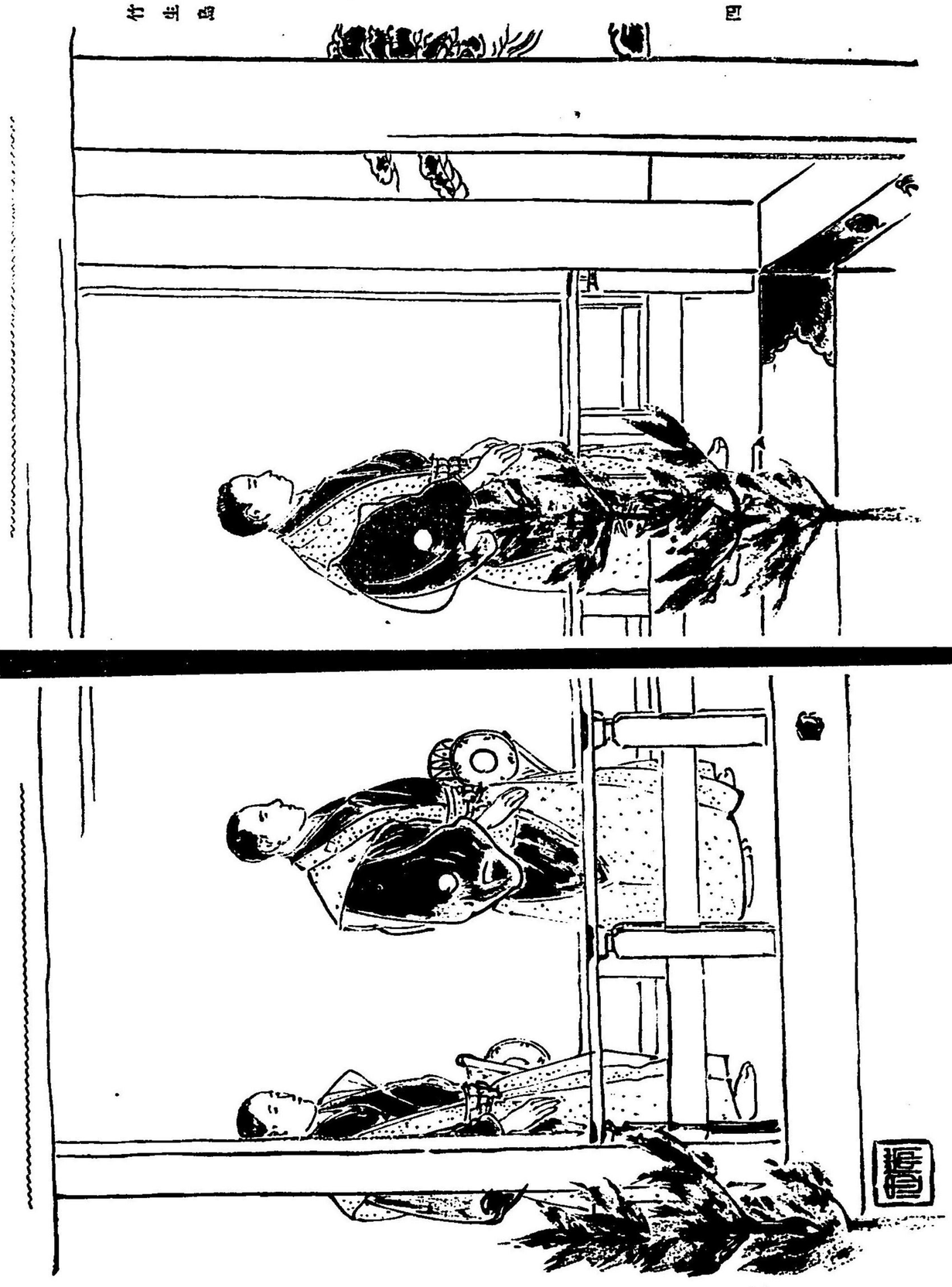
「抑も是は延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり」云々のワキの名乘あり。其間はワキ正面を向き。ワキツレは座して敬禮を表し。打切すみて一同に向き合ひ道行を歌ふ。道行の文句には。四の宮河原。走井。逢坂。など京都より近江までの名所々々を打ち過ぎて。志賀の浦に到着するよしの意味あり。

道行

ワキ

道行すむと。鴨の浦に着きたるよしのワキの詞あり。之をツキゼリフといふ。鴨の海は琵琶湖の一名なれば。その湖の海岸をば何くにても鴨の浦といふべし。かくて「あれを見れば釣舟の來り候。暫く相待ち便船を乞はゞやと存じ候」といひて。ワキもワキツレも脇座に至り着席す。船のよりくるを待ち居る心なり。

ツキゼリフ



姥のいたずらの姥

舟出づ

シテ出づ

後見舟の作物を持ち出て丶仕手柱先に置くと。一聲になりて先ツレ女。次に老翁のシテと出て來り。共に舟の中に入り。シテは左の手に棹を持ちて歌ひ出だす。その文句は。「おもしろや頃は彌生の半なれば。波もうらゝに海の面」とシテ歌ひ。「霞みわたれる朝ぼらけ」とツレ歌ひ。「長閑に通ふ船の道」とシテ歌ひ。「憂きわざとなき心かな」と二人同吟して。天氣快晴なれば船中も興ある心を述べ。次に。是は此浦里に住みなれて。明暮はこぶ鱗の」とシテ獨吟し。「數を盡して身一つを。助けやせんとわび人の。隙も波間に明けくれて。世をわたるこそ物うけれ」とツレと同吟して。又よく我身を顧みれば。生物を捕りて糊口とする漁夫の職業のあさましきを感じ。更に又思ひ直して。「よし〳〵同じわざながら。世に越えたりな此海の」と。他の海士どもと違ひ。天下に名高き湖水に浮びてなりはひする身の幸福を思へば。憂も何も忘れ果てたる有樣を歌ふ。抑揚あり變化ありて味ある文句といふべし。それより上歌になりて。「名どころ多き數々に。〳〵。浦山かけてながむれば。志賀の都花園。むかしながらの山櫻。眞野の入江の舟呼ばひ。いざさしよせて事問はん。〳〵」と。心なぐさみて見渡す景色の面白きをいひ。「舟呼ばひ」の文句にて我舟を呼ぶ人あるは誰ならんとほのかにワキ一行の待ち居る心を聞かせ。「いざさしよせて」にて。能の舟は動かねども。想像の舟は陸なるワキの方に近づき來る意味を知らせたり。此時シテは棹の先に右の手を掛けて。さをさしよするカタをするなり。

右にいひたる「おもしろや頃は彌生の」の文句はサシにて。脇能の本式たる眞の一聲にならねば。翁附などの脇能式といふ時には。白髭の。一セイ二人「釣のいとなみいつまでか。ひまも波間に明け暮れん。」ツレ「さをさしなるゝ海士小舟。」二人「わたりかねたるうき世かな」を。「おもしろや頃は」の前に置きて用ふる事あり。おのれも

一度故觀世清孝の竹生島にて見たりき。梅若の舞臺なりしか。
芝の能樂堂にてなりしかは確かに覺えず。

問答

ワキ立ちて「如何に是なる舟に便船申さうなふ」といひ。シテ棹を留めて「是は渡舟にてもなし。御覽候へ釣舟にて候よ」と答へ。ワキ「こなたも釣舟と見て候へばこそ便船とは申せ。これは竹生島に初めて參詣のものなり。誓の舟に乘るべきなり」と求め。シテ「げに此所は靈地にて。歩みを運び給ふ人を。とかく申さば御心にも違ひ。又は神慮もはかりがたし」といへば。ツレも「さらば御舟を參らせん」と承諾し。ワキ「うれしやさては迎の舟。法の力と覺えたり」と喜びを述ぶれば。シテ「今日は殊更のどかにて。心にかゝる風もなし」と。海路の安全なるを告げて地になり。「お舟にめされて浦々をながめ給へやと手にてワキを指すと。ワキ心得て舟に乘り。ワキもツレも下に居る時。舟は陸を離れて漕ぎ出づる心なり。ワキツレは乘らずして脇座の下に殘

ワキ舟に乘る

島に上陸す

り居れども。是はワキ一人に代表せしめたるにて。殘り居るは陰なりと知るべし。

主客ともにこゝかしこの風景をながめゆく程に。舟は竹生島に近づき。緑樹かげ沈んで魚木にのぼり。月海上に浮んでは兎も波をはしるなど。おのづから口ずさまるゝ所のさま。文句のみにても目に見る如し。況んや能を見て其實景の想像せらるゝをや。

舟が着きたるよしの詞ありて。皆一同に舟を出づると後見は舟を持ちて樂屋に入れ。ワキは脇座に。ツレは地の前に着席し。シテは宮の作物に向ひて。是こそ辨財天の社なるよしをワキに敎へ。ワキは聞き及びたるよりも有難き趣を述べて。此島は女人禁制なるにツレ女の何しに上陸せしぞと問ふ。シテは九生如來御再誕の地にて女人も濟度せんとの御誓なれば。女人の參詣するもあしからぬよしを語り。ツレは其理をいふまでもなく御神躰なる辨財天も女人なるにと辯解

中入

間

し。神德のいはれなど二人にて語りゐたりしが。間もなく我は人間にあらずと名のりて。ツレは宮の作物に入り。シテは水中に入りて橋掛より靜に中入す。こゝに始めて男女と見え給へるは龍神と天女となる事が知らるゝなり。

シテ中入するとアヒ例の如く名乘座に出てゝいふ。「かやうに候者は。江州竹生島の天女に仕へ申す能力にて候。誠に國々在々に。靈佛靈社あまた御座あるとは申せども。何れも隱れもなきは。安藝の嚴島。天の川。箕面江の島。さて此竹生島。何れも隱れなきとは申せども。取分當島の天女は。天下にかくれ御座ないによつて。國々所々より信仰仕り。參下向の人々は。おびたゝしい事にて候。又只今は。當今に仕へ御申しある臣下殿。はじめて當島へ參詣にて候間。我等も罷り出て御禮申さうと存ずる。」といひて。ワキの前にゆき。禮をなして寶物拜見の御望

寶物拜見

岩飛

は御座なきかなど問ひ。見せよと所望せられて種々の品物を持ち出だし。「是は當島一の寶物二俱の竹て御座る。是はすなはち寶藏の御鍵で御座る。是が天女の看經のなさるゝ數珠て御座る。是は七男の脇毛て御座る。まづ當島の寶物は此くの如くにて候。さて當島の神秘に岩飛と申す事が御座る。これを學うて見せ申さうずるが。何と御座あらうずるぞ」といふ。是もして見せよとの所望を受け。「さらば急いて岩飛いたさう」とて。皷太皷などのアシラヒにて謠となり。

いて〳〵岩飛はじめんとて。〳〵。嚴の上に走りのぼり。東を見れば。日輪月輪てりかゝやきて。西を見れば入日を招き。あぶなそうなる嚴の上より。〳〵も。水底にづゝぶとはいりけり。

と歌ひながら飛び入りたる心にて膝を突き。水中に入りて寒か

りしとて。「くつさめ〳〵」とクシャミをして留むる。是にてアヒ終るなり。

出端

アヒ濟むと出端になり。「御殿しきりに鳴動して。日月ひかりかゝやきて。山の端いづる如くにて。あらはれ給ふぞかたじけなき」と地より歌ひいだし。

後ヅレ

後見宮の引廻を取ると。中には天冠長絹の後ヅレ天女。優美壯嚴に床儿にかゝりて。「そも〳〵是は。この島に住んで神を敬ひ國を守る。辨財天とは我事なり」と歌ひ。地にて「その時虚空に音樂きこえ。〳〵」と歌ふ時。天女は宮より出でゝ。「月にかゝやく乙女の袂」と。正面に開きつゝ其姿をはッきりと見せ。長絹のツユの垂れたる端を手にて取りながら右に廻り。「かへす〳〵もおもしろや」と達拜して三段の舞となる。太鼓入にて暖しく勇しさ限りなし。

ツレ三段の舞

舞すみて「夜遊の舞樂も時すぎて」と左右打込などありて。「波風しきりに鳴動して」とさして廻り。幕の方に向ひ雲の扇して。「下界の龍神あ

らはれたり」と。シテの出て來るを見渡して後。笛座の上にゆきて着座す。但し此時天女のながめやりたるシテは。幕よりも向ふに遙に見えたる心なれど。未だ見物人の目には見え來らぬなり。

後ジテ

それより早笛となりて。龍神委の後ジテは玉を兩手に持ち出て來り。「龍神湖上に出現して」と拍子ありて。「光もかゝやく金銀珠玉を」と持ちたる玉を見。「かのまれ人に捧ぐるけしき」とワキの前にゆきて渡し。

働舞キリ

「有難かりける奇特かな」と。後にさしたる打枝を抜き持ちて舞働となり。終りて「もとより衆生濟度の誓」と拍子ふみ。「あるひは天女の形を現じ」と天女に胸ざしをなし。「有縁の衆生の所願を叶へ」とさしまはして衆生を見わたし。「または下界の龍神となつて」と拍子ふみ。「天女は宮中に入らせ給へば」と。此時天女の幕に入るを見おくり。「龍神は即ち湖水に飛行して」と海上をさして前の方へ出て。「波を蹴立て」と拍子ふみて荒波を蹴立つるカタあり。「天地にむらがる大蛇の形は」と仕手柱へ乘り込み。飛びかへり下に居て左の袖かづき。直に立ちて留拍子ふむこと例の如し。

女体

近江の彦根は湖水に沿ひて竹生島に縁故ある地なれば。其御神躰たる天女をツレにするは恐ありとにや。其藩主井伊家にては此能をするに。女躰と稱へて天女をシテにする事あり。こは喜多流に限る事にて。中入の後。天女なるシテは。三段の舞のところに樂を舞ひ。龍神はツレにて例の如く出て。「天女は宮中に」と宮の中に入りて床几にかゝり。龍神さま〳〵カタありて幕に入ると。天女作物より出てゝ拍子ふみとむるなり。おのれも二度ばかり見たりしが。常のよりは緩急など多くして面白かりき。

清經

シテ　左中將清經
面中將　梨子打烏帽子　黑垂　白鉢卷
厚板　法被又は長絹　大口　腰帶
太刀　扇

ツレ　妻
女面　唐織若流し

ワキ　家臣
段袋斗目　掛素袍　大口　腰帶　扇
笠　守袋(首に掛く實は袈裟なり)

平家の運命すでに極まりぬるを嘆き。豐前の國柳が浦の船上より入水せし左中將清經の家臣。かたみの品を持ちて都に歸り來

ツレ出づ
ワキ出づ
次第
名乘
進行

り。妻なりし人のもとに音づれしかば。之を見るより泣き沈む程に。清經の幽靈夢現の間にあらはれ。平家末路のさまと我身を投げたる心とを語りいづる事を作れる能なり。修羅物にて太皷なし。季節は時雨の頃なれば暮秋か初冬なるべし。

囃子方座に着くとツレ出て、脇座の處に下に居る。

次第にてワキ出づ。九州より都にのぼる心にて笠を着し旅中の躰なり。例の如く仕手柱先より大小の方むきて。「八重の汐路の浦の波。八重の汐路の浦なみ。九重にいざや歸らん」を歌ひ。笠を脫ぎ正面むきて。「是は左中將清經の御内に仕へ申す。淡津の三郎と申す者にて候云々」の名乘をなして。清經の入水せし事と。御形見を持ちて唯今都にのぼるよしを述べ。再び笠を着して進行を歌ふ。「此程は鄙の住居になれ〳〵て。たま〳〵歸る故郷の。昔の春に引きかへて。今は物うき秋くれて。はや時雨ふる旅衣しをるゝ袖の身の果を。忍び〳〵にのぼ

りけり。」久しく西海の陣中に隨行せし事より。身の上世のさま。すべて昔にかはりて悲しき心を。春すぎ秋の暮るゝに比していへり。謠の上手なるワキならば。所作はなくとも。いかに聽衆を感動せしめうべき文句ならずや。

ワキとツレとの問答

道行すみ笠を脱ぎ着ゼリフありて案内を乞ふ。此時いまだ室を隔てゝツレとワキとは對面せざる体なり。

ゼリフ

聲を聞きつけて奥より「なに淡津の三郎と申すか。人までもあるまじ此方へ來り候へ」といふ。よりてワキは中に入る心にてツレの前に進むと。ツレより「さて只今は何のための御使にてあるぞ」と問ふ。ワキ答へて「面目なきとは若し御遁世にてあるか」と問ひ返され。「いや御遁世にても御座なく候」とのみ答へて言ひかね居たるを。「過ぎにし築紫の軍にも御つゝがなきとこそ聞きつるに」と更に問はれて。遂に更けゆく月の夜舟より身を投げ空しくなり給ひたるよしを報告す。ワキは窮しツレは慈く。呼吸少しも緩みなし。見物も胸潰き情迫らんとす。

形見を渡す

こゝにて嘆き悲しむ餘りに夫の入水を恨む心の文句さま〳〵ありて。袖をしぼり泣き居ると。ワキは船中に殘り居たりとて鬢の髪を御形見なりとてツレに渡す。

ツレは涙を拂ひ受け取り見て。「是は中將殿の黒髪かや。見れば目もくれ心消え。猶も思のまさるぞや」と歌ひ。「見る度に心づくしの髪なれば。うさにぞ返すもとの社にと」と一首の和歌に懷を述べ。「手向け返して夜もすがら。涙と共に思ひ寐の。夢になりとも見え給へと。寐られぬに傾くる。枕や戀を知らすらん」の地の内に。ワキは切戸より樂屋に入り。清經の幽靈なるシテは靜々と橋掛より出てゝ。仕手柱先に立ち。「枕や戀を知らすらん」の返し濟みて。「聖人に夢なし。誰あつて現と見る」を歌ひ出すなり。

シテ出づ

清經

此シテの出に戀の音取といふ笛の秘事あり。先年梅若の舞臺にて觀世鐵之丞の物せし時の事を。記憶のまゝにいはゞ。「手向けかへして」の地になると。笛役の一噌要三郎は席を進み出て。地謠の末席を後にして幕の方に向ひ座し。地謠は「枕や戀を知らすらん」と調子めらして歌ひ。謠切れて音取の唱歌を吹き始むると。シテは幕上げさせて靜に出て。三の松にて正面むき其音に耳を傾くる形あり。又二の松まで進み。足とめ少し正面の方受けて開き。又一の松にては正面受けてとくと聞く形ありて。それよりしづ〳〵と舞臺に入り。仕手柱先にて「聖人に夢なし」以下の文句は抜けて。直に「うたゝ寐に戀しき人を見てしより」と歌ひ出だし。又次の「今は恨を御晴れ候へ」より直に「そも〳〵宇佐八幡に參籠し」に續きて。其間の文句は抜けたり。

この戀の音取の名稱は觀世流にして。金春宗生二流にては音取とのみ稱へ。金剛流にては披講音取と稱へ。喜多流にては音取之出と稱ふ。

「如何に古へ人。清經こそ參りて候へ」とツレに向きて歌ひかくると。「ふしぎやなまどろむ枕に見え給ふは。げに清經にてましませども。正しく身を投げ給へるが。夢ならでいかなる何が見ゆべきぞ」とツレ怪しみ問ふ。是より恨みつ恨みられつの問答いろ〳〵ありて地の同吟となり。「恨をさへにいひそへて」と据拍子あり。「くねる涙の手枕を」と正面へ開き。ならべて二人が逢ふ夜なれど」と指し廻しゝて左の手を出だしながらツレの前にゆき。「げにや形見こそ」と左へ廻りてツレへ開き。詞になりて「古の事ども語つて聞かせ候べし。今は恨を御晴れ候へ」と述べて其中にゆき床几にかゝる。是より物語の文句なり。「さりともと思ふ心も虫の音も。弱り果てぬる秋の暮かな」と失望落膽の心ありて。「さては。佛神三寶も。同「捨て果て給ふと心ぼそくて」と

扇打合をなして斷念の意を示し。「一門は氣を失ひ」と指しまはしゝて一門を見わたし。「力をおとして足弱車のすご〳〵と」と正面へ出て。力よわりたじ〳〵と下りて。「遺幸なし奉る」と奉送する心にて兩手つき拜をなし。「あはれなりし有樣」と打ちしをり泣く。いかにも文句の如くあはれなる處なり。

打切ありてクセとなり。「長門の國へも敵向ふと聞きしかば。又舟に取り乘りて」と。乘船する心にて正面へ乘り込み。角へ行きて左へ廻り。正面にて「壽永の秋の紅葉とて」と開き。「ちり〳〵になり浮ぶ」と指し廻してながめわたす心あり。「一葉の舟なれや」と拍子ふみて開き。「追手がほなる跡の波」と脇座にゆきて橋掛の方へ開き。「白鷺の群れゐる松見れば」と出かけて。「源氏の旗を靡かす」と指して廻り。「多勢かと肝を消す」と拍子一つ踏みて驚の意をあらはし。「誠正直の頭に宿り給ふかと」と頭を指し。「唯一筋に思ひ取り」と左右して扇を開き上羽となる

能のしなり　二の巻

る。

「あぢきなやとても消ゆべき露の身を」と上扇して開き。大左右打込開きなど例の如くありて。「うきめを水鳥の」と下の方をさしまはし。右へまはりて「月に嘯くけしきにて」と。抱扇して右の方に月を見あげながら、舟のへいたに立ちあがり」と正面へ乗込み。「腰よりやうでう」と扇にて腰にさしたる横笛を抜き出だす形をなし。「音もすみやかに吹きならし」と扇に左の手そへて笛を吹く形を學び。「今様をうたひ朗詠し」と拍子ふみて。「こしかた行末をかゞみて」と角より左へ廻り。「此世とても旅ぞかし」とツレへ向きて開き。「よそ目にはひたふる」とさしまはして人々を見まはし。「狂人と人や見るらん」と拍子ふみ。「よし人は何とも見る目を假の夜の空」と角より脇座の方へ行き。「西に傾く月を見れば」と。橋掛の方に雲の扇して入らんとする月を遠くながめ。「いざや我もつれんと」と進みて合掌し。「南無あみだぶつ彌陀如來」と拍子

ふみ。「たゞ一聲を最期にて」と指して角へ行き。「船よりかつぱと」と乗込みておのが水に落つる心をあらはし。「落汐の」と扇前に出だして其落ちたる人を他より見おろす形をなしそりがへりして跡に下り。「底の水屑と沈みゆくうき身の果ぞかなしき」と平座して打ちしをる。月沈みて夜いまだ明けず。風寒く人凄し。

クセの間の形。戀の音取の時に見たりしは。「又舟に取り乗りて」より直に橋掛にゆき。「春永の秋の紅葉とて」と一の松にて開き。そこにて常の形をなし。「こゝに清經は」より舞臺に入る。「いざや我もつれんと」は下に居て合掌し。「なむあみだ佛」の拍子は蹈まざりき。

クセの替の形

クセどめに平座するとツレ「聞くに心も呉はとり。うきねに沈む涙の雨の。恨めしかりける契かな」を歌ひ。シテ「いふならく那落も同じうたかたの。あはれは誰もかはらざりけり」を歌ひ。「さて」と扇にて下を

一つ打ち。「たづきは敵雨は矢先」と出て丶開き。「山は鐵城」と山を見あぐる心にて高く見。「雲のはたてをついて」と扇左に取りて楯となし太刀を拔いて。角取り左へ廻り。仕手柱先にて行きがゝりに。「無明も法性も」トコトン〳〵〳〵トゝンと拍子ふみ。「亂るゝ敵」と脇座の方へ楯を押して行き。「打つは波」と一つ太刀にて切りつけ。「引くは潮」と跡へ下りて合膝して廻り。「是までなりや」とツレへ向き。角より脇座の方へゆき。さしゆきて仕手柱にて小廻し。脇正面へ詰足留拍子ふみて舞ひ納むるなり。優美にして戀と無常との心ふかし。武士として討死もせずに身を投ぐるとは。如何にも男らしからぬ最期なればとて。徳川時代には武人社會に此能を嫌ひたる人も多かりしとぞ。

熊野

作物　車

シテ　長者の娘熊野
小面又ハ若女　葛帶　唐織若流し
扇　短冊(左の袂に入る)

ツレ　朝顏
女面　葛　葛帶　唐織若流し　文(懷中す)

ワキ　平宗盛
風折烏帽子　厚板　大口　長袴　腰帶　扇

トモ　從者
素袍上下　太刀持つ

平宗盛の愛妾に熊野といへるあり。遠江の國池田の宿の長者の娘なるが。老母大病なりとて國元より度々文を遣はしたれども

暇をゆるさゞりしかば。朝顔といふ侍女はる〳〵使に來り母の文を渡して病の篤きよしを語る。よりて熊野は宗盛の前にて之を讀み上げ。かやうの次第なればと切に暇を乞ひたりしに。さやうの心弱さにては叶はねば。共に花見して心を慰むべしと急ぎ車を引き出ださせ。清水寺にものしたるに。酒宴半にして一村雨ふり來り盛の花を散らせしかば。熊野は一首の歌をよみ。いかにせん都の春も惜しけれど。なれし東の花や散るらんと。短冊に書きて宗盛に示したるに。さばかり情なき宗盛も此歌のあはれさに心動き。直に暇を與へしかば。熊野は喜びて宿所へも歸らず故郷に歸る事を作れり。葛物の一つにて太皷なし。土地は京都。季節は春。

ワキの名

ワキ先づトモを從へて出て。「是は平の宗盛なり」云々の名乘をして脇座に床几に掛り。トモは太刀を置きて其次に座す。

ツレ出づ

次第にてツレ出て。「夢の間をしき春なれや。咲く頃花を尋ねん」を歌ひ。「是は遠江の國池田の宿」云々の名乘ありて。熊野の御迎に都にのぼるよしを述べ。道行の謠すみて都に着きたる詞あり。橋掛にゆきて幕の方に向ひ。「いかに案内申し候。都より朝顔が參りて候それそれ御申し候へ」といひて。一先後見座へくつろぎ居ると。シテ幕上げさせてアシラヒ皷にて出て。三の松に正面むきて立ち。「草木は雨露のめぐみ。養ひ得ては花の父母たり。況んや人間に於てをや。あら御心もとなや。何とか御入り候らん」と歌ひ。花を見るにも母の上のみ心にかゝるよしを獨語す。こゝは熊野の宿所の躰にて。いまだ朝顔の案内は聞えざる間の趣なり。いつぞや金春流の櫻間伴馬が幕の内にて此文句を歌ひしかば。同人に珍しき形にて面白かりしよし言ひたるに。此形は流儀にては重くしたるを。拙者今年六十になりたるをもて家元より許されたりといへり。他の流儀にも幕の内の謠出しシテ出づ

文をシテに渡す

ありや知らず。

此謡の内にツレ立ちて一の松までゆき。謡切るゝと重ねて「池田の宿より朝顔が參りて候」といふと。始めて開きつけたるさまにて。「何朝顔と申すかあら珍しや。さて御痛はりは何と御入りあるぞ」と問ふ。奥に通して對面する心なり。「以ての外に御入り候。是に御文の候御覽候へ」といひて懐中の文を出だす。シテ受取りて。「あら嬉しやまづまづ御文を見うずるにて候」といひながら正面むき。開きて之を讀む。但し後に朗讀する處あれば。こゝには讀みたる形のみにて文句は言はず。

一讀して心細き文章なるに驚き。「あら笑止や。此御文のやうも頼み少う見えて候」とツレにいへば。ツレも左樣に御入り候」と答ふ。さらば朝顔をも同道にて宗盛の御前に出て。此文をも御目にかけて御暇を乞はんと。舞臺に入りて其由を告ぐれば。トモ取次ぎて此方へ來

一

文の段

初同

れといはれ。進みて老母よりの迎に朝顔の來れる事を述べて文を御覽に入れんといふ。見るまでもなしそれにて高らかに讀めといはれ。御前に於て其文句を讀み上ぐ。此處を名づけて熊野の文の段といへり。「唯かへす〳〵も」と文を見かへす形などあり。

此文の段を流儀によりてはシテとワキと同吟するもあり。觀世流にても讀繼之傳とて半より同吟にする事もあれど。是はワキが見るまでもなしと冷淡にいたひるにより。シテ一人にて讀み上ぐる方が。味あるやうなり。

文を讀みをはり。打切になりて文を疊み下に置くと。後見かたづける。初同の謡になりて。「千代もと祈る子のためとよみし事こそあはれなれ」と打ち泣き。「今はかやうに候へば。御暇を賜はり東に下り候べし」とワキに乞ひしに。「老母の痛はりはさる事なれどもさりながら。此春ばかりの花見の友。いかでか見捨て給ふべき」といはれ。「御言葉

車出し

を返せば恐なれども。花は春あらば今に限るべからず。是はあだなる玉の緒の。長き別となりやせん。たゞ御暇を賜はり候へ」と。重ねて理りを述べ泣く〳〵請願せしに。ワキは少しも聞き入れぬのみか。「いや〳〵左樣に心弱き。身にまかては叶ふまじ。いかにも心を慰めの。花見の車同車にて。共に心を慰まんと」と。花見隨行の嚴命下る。「牛飼車よせよとて」の處に。急ぎ車を用意せよとのワキの詞あり。トモは命を奉じ車の用意を言ひつけたる心にて。アシラヒの内に後見車の作物を持ち出で。見附柱の處に置く。此處の皷のアシラヒを車出しといへり。地謠にて其心得なき時は。車の出づるも待たず「牛飼車」の返しを歌ひ出だして。ワキより叱られたる話もあり。さすが都會の地にて左樣の失策は聞かねど。田舍の神事能などには。かゝる滑稽話も時々聞ゆ。

車いで〻返しあり。「これも思の家の内。はや御出とすゝむれば」とシテ立ちて。「心は先にゆきかぬる足弱車の。力なき花見なりけり」と。車に乘る心にて作物の中に入ると。ツレは其あとにワキは其左に皆車中の心にて立ち居る。

シテ車に乘る

車中の眺望

シテ「名も清き水のまに〳〵とめくれば」を歌ひ。地「河は音羽の山櫻」を歌ひ。シテ「東路とても東山せめてそなたのなつかしや」を歌ひつゝ打ち泣く。車より見渡すけしきと其心中とを歌へるなり。「四條五條の橋の上。老若男女貴賤都鄙。色めく花衣。袖をつらねてゆく末の」と。右の方に花見の群集をながめわたす形あり。又ロンギになりて。「げに恐ろしや此道は。冥途に通ふなるものを。心ぼそ鳥部山」と。右の方に鳥部山を見る處あり。前なる」は車まだ橋を渡る頃なるべく。後なるは既に清水坂に掛りてからと知るべし。さま〳〵の文句の内に車やう〳〵に山門に近く。「經書堂は是かとよ」と左の方に經書堂を見。「車やどり」「馬とゞめ」と左右を見。「こゝより花車」と跡しさりに車を出て。

車を下る

正面の方にゆき本堂の佛前の心にて。「母の祈誓を申さん」と合掌禮拜す。此間にツレはシテの後にゆきて下に居り。ワキは本の座にかへり是も下に居る。後見此時車持ち入るなり。

ワキはトモを呼びて「熊野は何くにあるぞ」と問ふ。未だ御堂にあるよしを答ふれば急ぎ來るべしと命じ。トモはゆきてツレに告ぐ。シテ此に於て御堂を立ちて「なふ〳〵皆々近う御參り候へ」と誘ひながら花のもとに至り。「あら面白の花や候。今を盛と見えて候に。何とて御當座などをも遊ばされ候はぬぞ」と。人々の歌をもよまで居たるを怪しみしが。我身の上に取つて返し。「げにや思内にあれば。色外にあらはる」とクリの節にて懷を述べ。打ちしをりつゝ眞中にゆきて下に居たるが。折角の花見の御酒宴なればと思直して。「花前に蝶舞ふ紛々たる雪」を歌ひ。是より或は眺望となり或は憂愁となり。樂しみを歌ふかと思へば悲しみの聲と變じ。クセは殊に名文にして清水より

能のしなり　二の卷

見わたさるゝ風景のこす處なし。

クセの仕舞

「立ち出でゝ峰の雲」よりシテ立ちて舞ふ。一は座興を添ふる心なるべく。一はながめやる名所々々を示しながら立ちあがる心もあるべし。「南を遙にながむれば」と上扇して大左右す。クセ常式の形なれど。顔の前に出だしたる扇をのくる處に。遙にながむる心をも含めて見るべきか。これらは常式の形を意味ある事に活用せしともいひつべし。

シテ酌に立つ

「稲荷の山の薄紅葉の」と指し廻しゝて伏見の稲荷山を見わたす處など。いつもある形ながら殊に此能には優美に見なさるゝは。花の雲間に見え隠れする淀鳥羽竹田までも想やらるればならん。クセすみて「深き情を人や知る」の謡の内に。シテ扇を開きて酒を一つ汲み。「童御酌に参り候べし」とてワキの前にゆく。「如何に熊野一さし舞ひ候へ」といはれて立ちあがり。「深き情を人や知る」の謡にて橋掛まてゆき。笛のイロへになりて舞臺に踏り中の舞を舞ふ。之をイロへ掛り中の舞と

イロへ掛り中の舞

村雨之傳

いふなり。

中の舞の留に仕手柱先にて脇正面の方の空打ちながめ。「なふ〳〵俄に村雨のして花の散り候は如何に」と歌ふ。舞の闌なる時に降り來る心なり。されば觀世流にては村雨之傳とて舞の半にて歌ひ出だす秘事もあるなり。この文句にて舞に見とれるたりし宗盛も始めて心づき。「げに〳〵村雨の降り來つて花を散らし候よ」と歌ひ。「あら心なの村雨やな春雨の」とシテ歌ひながら乘込拍子ふみて。「ふるは涙か〳〵櫻花」と角にて扇かざして空を見上げ。左に廻りて脇正面の方の上より散りくる花を見まはし。扇を左に持ちて之を受けながら正面先に出て。扇をとくと見て受けとめたる落花を惜しむ心の深さを見せ。右の方に廻りて眞中に座し扇を伏せて受けたる花を捨つる形あり。此時やう〳〵和歌の趣向の出來かゝりたる心なるべし。惜しむ餘りに花を受くるなど。風流といはんか優美といはんか。能の眞味はこ

短冊の段

こちらにありとやいはまし。

暫くして左の袂より短冊を出だし。扇を疊み要の處を鉾の穂先にして逆さまに持ち。墨に浸しては短冊に書く心あり。扇開きたる上に之を載せて持ち行きワキに渡すと。「よしありげなる言葉の種とりあげ見れば」といひて短冊を一覽し。「いかにせん都の春も惜しけれど」と讀みあぐれば。シテは下の句を繼ぎて。「なれし東の花や散るらん」と讀む。ワキ此和歌に感じて暇をゆるし東に下るべしといひ。シテは嬉しさに觀音の御利生なりと伏し拜む。見聞く人まで村雨ならぬ心さへ晴れわたる處なり。

キリ

「かくて都に御供せば。又もや御意のかはるべき。只此まゝに御暇と」とワキに向き會釋する心にて立ち。仕手柱までゆき少し立ち歸りて正面へ出て雲の扇して。「明けゆく跡の山見えて」と東の山の端をながめわたす形あり。「花を見すつる雁金の」とさして角よりかざし廻り。

「東にかへる名殘かなの返しに拍子ふみて舞ひ納む。此キリは「ゆふつけの鳥が鳴く」より橋掛にゆきてするもあり。花傳書に。熊野の明けゆく跡の山見えてといふ處の仕舞。人毎に明けゆくと東を見る是れ僻事なり。明けゆく跡といふせんなし。西を見れば明けゆく跡のせんありと見ゆ。おのれ思ふに。花傳書の說は「跡」の文字を後の意に取りたるならん。然れどもこゝは夜の明け離るゝ跡の山といふ心にて。時刻の跡なれば矢張東の山をながむるとそせんはあるべけれ。

隅田川

シテ　狂女

深井　葛　葛帶　箔　腰卷　水衣　笠

能のしなり　二の卷

作物　塚に柳

鉦　打鉦　鐘木

子方　梅若丸亡靈

黑頭　着　白水衣

ワキ　渡守

素袍上下　扇

ワキツレ　旅人

大口　掛素袍　扇

都なる吉田の何がしの妻。愛兒梅若丸の人商人にかどはかされて行方知られずなりたるを嘆き。物狂となりて跡を追ひ來りしに。隅田川の渡舟にて最期の有樣を聞き。又その墓にて今日は命日なれば大念佛のあるといはれて。母も鉦を打ちつゝ念佛したりしに。我子の亡靈夢幻の内にあらはれて詞をかはし。見えつ隱れつして遂に東の白むと共に消え失するといふ筋の事を作れる能なり。これらの能を狂女物といふ。太鼓なし。土地は武藏。季節は春の三月十五日。

ワキの名乘

ワキツレ出づ

囃子方座に着くと作物大小前へ出だす。中に子方入りて出づるなり。ワキ出でゝ名乘あり。「是は武藏の國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又此在所にさる子細あつて。大念佛を申す事の候間。僧俗を嫌はず人數を集め候。其由皆々心得候へ」といひて脇座にゆき待ち居ると。次第にてワキツレの男出て。「末も東の旅衣。日も遥々の心かなを歌ひ。都より東に知る人を尋ねて下るよしの名乘。國々過ぎて隅田川に着きたるよしの道行ありて。ワキを呼び掛け舟に乘りたしといふ。ワキは之を見て。御出て候あとの物騒なりしは何事ぞと問ふ。都より女物狂の來りて是非もなく狂ふを見物する人々ぞといへば。さらば暫く出船を見合はせて其物狂を待たんとて。二人脇座の方に下に居る。

シテ出づ

一聲になりてシテ笹をかたげ出て。橋掛にて「げにや人の親の心は暗にあらねども」を歌ひ。「聞くや如何にうはの空なる風だにも」と舞臺に入り。「松に音する習あり」と乘込拍子ふみてカケリとなり。「眞葛が原の露の世に」と仕手柱にて角の方まで乘込み。「身を恨みてや明けくれん」と面伏せて左へ廻り。仕手柱にて「千里をゆくも親心。子を忘れぬと聞くものを」の地になり。詰足するは千里をゆく心なるべし。

カケリ

「本よりも契り假なる一つ世の」と据拍子あり。「四鳥のわかれ是なれや」と出で、開き。「尋ぬる心の果やらん」と脇正面の方受けて二三足出て。「隅田川にも着きにけり」と大小前の方へ向きて二三足すゝみ。足とめてワキの方へ向き。「なふ〳〵我をも舟にのせて給はり候へ」と呼び掛く。

シテ隅田川に着く

舟に乘らんといふ

是より「お事は何くより何方へ下る人ぞ」とワキ問ひ。「是は都より人を尋ねて下る者にて候」とシテ答へ。「狂はずは此舟には乘せまじいぞと

都鳥を問ふ

よ」とワキ嘲弄し。「うたてやな隅田川の渡守ならば。日も暮れぬ舟に乘れとこそ承るべけれ。形の如くも都の者を。舟に乘るなと承るは。隅田川の渡守とも。おぼえぬ事な宣ひそよ」とシテ理屈を述ぶ。伊勢物語など引きて論じかくる處。さすがは都の賤しからぬ人なる風体も見え。狂氣のやうでもあり。狂氣ならぬやうでもあり。一言々々花風を含み。一句々々風花を吹きて。雪となり霰となり。水なき空まで波を立てんとす。見て面白く聞きてあはれなるは狂女物ぞかし。かくて「げに〳〵都の人とて」といはれては。名にしおはゞいざ言とはん都鳥の歌を吟じ。ふと白き鳥の浮べるを見ては何と申す鳥ぞと問ふ。「あれこそ沖の鷗候よ」と答ふれば。「うたてやな浦にては千鳥ともいへ鷗ともいへ。など此隅田川にて白に鳥をば。都鳥とは答へ給はぬ」と。又もや伊勢物語によりて理屈を述ぶ。今更かへらぬ事ながら。ワキを實生新蒲か春藤六右衛門か。もしくは福王繁十郎にさせて。

梅若實のシテを見たき處なり。

ワキこゝに於て「げに〳〵誤り申したり。名所には住めども心なくて。都鳥とは答へ申さて」と謝し。それより「沖の鴎と夕波の。」「むかしにかへる業平も。」「ありやなしやと言問ひしも。」「都の人を思妻。」「わらはも東に思子の。ゆくへを問ふは同じ心の。」「妻を忍び」「子を尋ぬるも。」「思は同じ」「樵路なれば」と。掛合の末シテ詰足して「われも又」の地となり。子を思ふ事いよ〳〵切に。情迫り心亂れたるさまにて。「いざ言問はん都鳥」と据拍子を踏み。「我思子は東路に。有りや無しやと。問へども問へども」と脇正面の方に見渡して面つかひ。「鄙の鳥とや言ひてまし」と開き。「げにや舟ぎほふ。堀江の川の水際に」と左へ廻りて。「それは難波江」と左の手にて脇柱の方へ指してゆき。「これは又すみだ川の東まて」と一の松までゆき。「思へば限なく。遠くも來ぬるものかな」と遠く見わたして心細きさまを思はせ。「さりとては渡守」と氣をかへて

ワキに向ふ。此處いつしか欄干の外には渺茫たる隅田川の漲り居るを見る心地すべし。

それより早足にて舞臺に入り。「船こぞりて狹くとも」と笹にて船中を指し廻し見る心ありて。「のせさせ給へ渡守」とワキの前へ進み出て。「さりとては乘せてたび給へ」と。下に居ながら笹にて一つ板を打ち。その笹にてワキを指し。強ひて乘船を請ふさまをなすもあり。又は笹を捨てゝ合掌し懇に頼む心を示すもあり。こゝらは定まりたる形とはいへ。シテの工夫にて色々あるべし。橋掛より舞臺に歸る時も。笹にてワキを招きながら走り來るシテもありしと覺ゆ。是は暫く出船を見合はしてと招き留むる心ならん。すべて謠に緩急あり。形に心持ありて。しばゑも見ばゑもある一段なり。狂女物の内かゝる處をクルヒと名づく。

「かゝるやさしき狂女こそ候はね。急いて舟に乘り候へ」とワキのいふ

舟に乘る

を聞きて。シテは笠を脱ぎ左の手に持ち。脇座の方へ行き舟に乘る心にて下に居る。笠は此時も笠に添へて持ち居るもあり。下に居る時前に横に置くもあり。又「さりとては乘せてたび給へ」の時。捨てゝ合掌するもあり。

舟やう〳〵向の岸に近づきたる心にて。ワキヅレの男は。向の柳の木の本に人の群集するを何事ぞと問ふ。ワキ答へて。「あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。此舟の向へ着き候はん程に語つて聞かせ申さうずるにて候」とて物語を始む。之をワキのカタリといへり。

ワキの語

「さても去年三月十五日。しかも今日に相當つて候。人商人の都より。年の程十二三ばかりなる稚き者を買ひ取つて奥へ下り候が。此をさなき者。いまだ習はぬ旅のつかれにや。以ての外に違例し。今は一足も引かれずとて。此河岸にひれふし候を。なんぼう世には情なき者の候ぞ。此をさなき者をば其まゝ路次に捨てゝ。商人は奥へ下つて候。さる間この邊の人々。此をさなき者の姿を見候に。よし有りげに見え候程に。樣々に痛はりて候へども。前世の事にてもや候ひけん。たんだ弱りに弱り。既に末期と見えし時。おことは何く如何なる人ぞと。父の名字をも國をも尋ねて候へば。我は都北白河に。吉田の何がしと申しゝ人の唯一人子にて候が」と語る時。耳をすましはッきりと聞きて。是より少しづゝ後に居るワキの方に向く心持あり。

「父にはおくれ母ばかりに添ひ參らせ候ひしを。人商人にかどはされて。かやうに成りゆき候。都の人の足手影もなつかしう候へば。此道の邊りに築き籠めて。しるしに柳を植ゑて給はれとおとなしやかに申し。念佛四五返稱へ遂に事終つて候」と聞きて泣き居たりしが。ワキは之に心附かず。よしなき長物語の間に舟が着きたればどうと

シテ舟人に亡兒の事を問ふ

う上れといふ。ワキヅレは今日此處に逗留して念佛申さうずるとて上陸せしに。シテまだ立たねば。「いかに是なる狂女。何とて舟よりはおりぬぞ急いで下り候へ」といひてシテを見たるに。泣き居るさまなれば。「あらやさしや。今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。急いで舟より上り候へ」と上陸を促がす。

シテこゝにて僅に涙を拂ひ。「なふ舟人」と呼び掛く。總べて此謠にシテの「なふ」と呼び掛くる事三度あり。其一は「なふ〳〵我をも舟に乘せて給はり候へ」にて。あれは遠くより呼び掛けて出船を待たしむる心なれば強く。其二は「なふ舟人。あれに白き鳥の見えたるは」にて。あたりに居る舟人に問ひかくるなれば此は輕く。其三はこゝなる「なふ舟人」にて。上陸せよといはるゝを暫しと止めて。情迫り涙あふれたる心より問ひ掛くるなれば。十分人の肺肝に徹する調子ならざるべからず。わづかに「なふ」の二文字。ワキの物語を活かしもし。又殺しもす。能のむつかしき點はこゝらにやあらん。

シテ愁嘆を極む

あだし言は暫く置き。「今の物語はいつの事にて候ぞ」とシテ問ふ。「去年三月今日の事にて候」とワキ答ふ。シテ「さて其兒の年は。」ワキ「十二歳。」シテ「ぬしの名は。」ワキ「梅若丸。」シテ「父の名字は。」ワキ「吉田の何がし。」シテ「さて其後は親とても尋ねず。」ワキ「親類とても尋ねこず。」シテ「まして母とても尋ねぬよなふ。」とワキの方へしッかりと向き。少し立ちあがる心にて問ひかけしが。「思ひもよらぬ事」といはれて。「なふ親類とても親とても。尋ねぬこそ理りなれ。其をさなき者こそ。此物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なふ是は夢かやあらあさましや候」と。愁嘆きはまりて泣く。見る人も聞く人も皆堪へかねて懷紙取り出ださぬはあらじ。

墓所に至る

ワキは餘りの痛はしさに彼人の墓所を見せんとて。泣き伏したるシテを伴ひ。大小前に出だしたる塚に柳の作物の前に至れば。シテは

塚なかへしてと迫る

之をとくと見下に居て。「今まではさりとも逢はんを頼みにこそ。知らぬ東に下りたるに。今は此世になき跡の。しるしばかりを見る事よ。さても無殘や死の繰とて。生所を去つて東の果の。道の邊りの土となりて。春の草のみ生ひ茂りたる。此下にこそ有るらめや」と。作物の下の方を見て亡き骸の埋もれゐるを悲しみ。「さりとては人々」とワキを見まはし。「この塚を」と再び下の方を見て。「かへして今一目」と。兩手を出だし下の土を掘りかへす心にて少し居立ちつゝ引立て。「この世の姿を母に見せさせ給へや」と。くしやりと平座して兩手にて泣く。既に及ばぬを知り望絶え心弱りたるさまなり。「殘りても。かひあるべきは空しくて」と打切りて。是よりシテの心中を歌ひ出だす文句になり。形はなけれど涙とゞめがたく。「見えつ隠れつ面影の」と。亡靈すでに目の前に浮びいづる心地せられて。悲しみの聲ながく柳の梢にあり。

鉦を取りて立つ

地にて念佛を歌ふ　ワキと共に念佛を稱ふ

ワキ之を慰めて。「今は何と御嘆き候ひてもかひなき事。たゞ念佛を御申し候ひて後世を御弔ひ候へ」といひつゝ。打鉦に鐘木を添へてシテに渡さんとすれば。シテは手にも取らずして。「母は餘りの悲しさに。念佛をさへ申さずして。唯ひれふして泣き居たり」と。手をもて涙を押へながら歌ふ。

ワキ更に慰めて。多くの人の念佛よりも母の御弔をこそ亡者も喜び給ふべけれと。重ねて近づき打鉦を手に渡せば。「我子のためと聞けばげに。此身も鬼鐘を取り上げて」と。始めて手に取りて立ちあがる。是より。ワキ「数きをとゞめ聲すむや。シテ「月の夜念佛もろともに。ワキ「心は西へと一筋に」と掛合に歌ひて。「南無や西方極樂世界。三十六萬億。同號同名阿彌陀佛」と。作物に向ひてシテワキ同吟しながら合掌し。地の念佛になりて。シテ鉦を打つ。念佛を同音に稱へ居る心なり。されど初の四返は聲もしめりて陰氣なりしが。「隅田河原の。

浪風も聲たてそへて」よりは。調子も高く賑はしく歌ふ習なるは。人數もやう〳〵に加はりたる心ならん。右の「隅田河原の」は正面にて指し廻す形ありて。又念佛になると作物に向きて鉦を打ち。「名にしおはゞ都鳥も音をそへて」と又正面にて都鳥を見る心あり。それより又地にて歌ふ三返の南無阿彌陀佛の内に。子方の念佛の聲のまじりたるを聞きつけ。二足三足と作物の方に近より行きしが。たしかに我子の聲なりと聞き得て。「なふ〳〵今の念佛の内に。まさしく我子の聲の聞え候。此塚の内にて有りげに候よ」とワキにいへば。「我等も左樣に聞きて候。所詮こなたの念佛をばとゞめ候べし。母御一人御申し候へ」とワキは勸む。よりてシテ作物の前に下居合掌し。「今一聲こそ聞かまほしけれ南無阿彌陀佛」と稱ふるを聞き。子方は作物の中にて二返の念佛を朗吟し。「聲の内より幻に見えければ」と。作物より出でゝ脇座の處に立つ。白水衣に黒頭なればさながら亡者の姿なり。

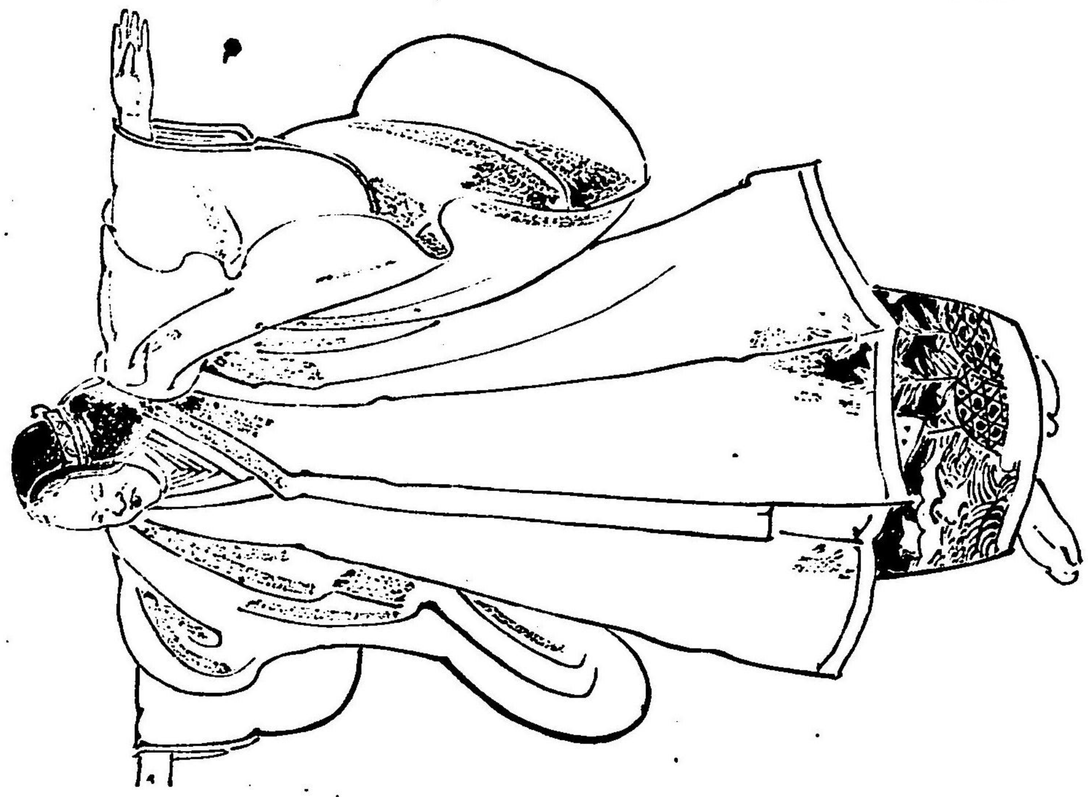
子方念佛を稱ふ

子方あらはる

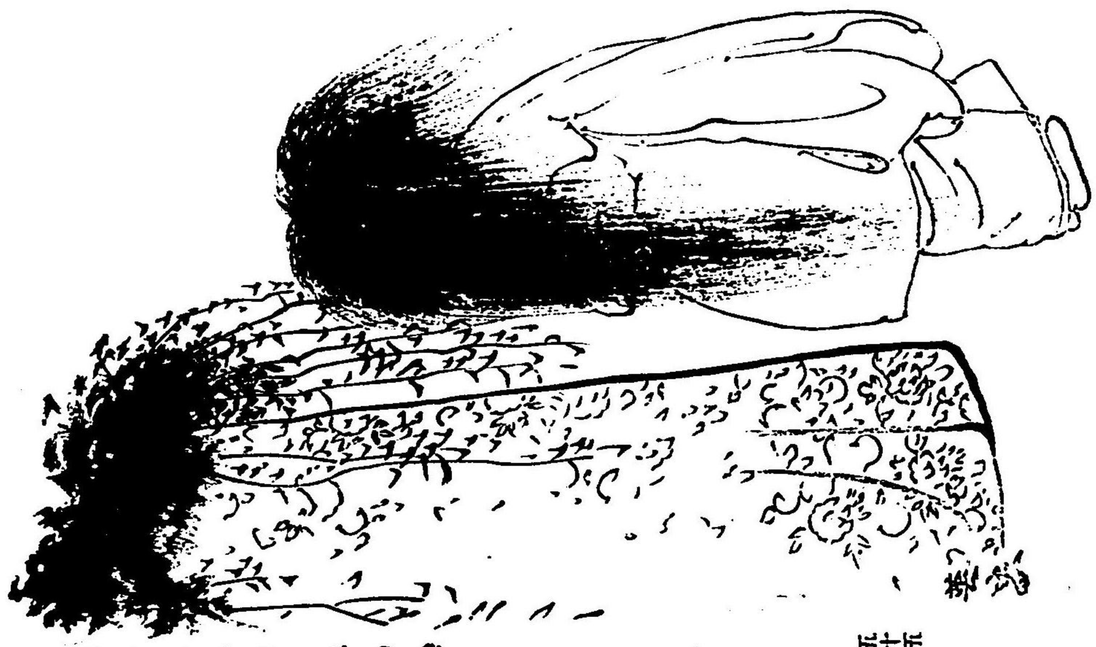
シテは涙ながらも之を見つけて。「あれは我子か」と叫ぶ。子方「母にてましますか」と呼ぶ。「互に手に手を取りかはせば又」と。シテは鉦と鐘木とを捨てゝ立ち。兩手ひろげて子方のそばにつか〳〵と行き抱きとめんとするに。子方は右へ左へとはづして。「きえ〳〵」となりゆけば」と作物に走り入る。シテは今まで有りし姿を見失ひて茫然と立ち。「いよ〳〵思ひは增鏡」と。二三足下りてたよ〳〵と打ち泣き。「面影も幻も」と。正面の方より見まはしながら行くに。此度は子方また作物より出でゝ脇正面の方に立ち居るを。シテは「見えつ」と見つけて兩手を廣げ。走り近づきて抱きとめんと又しつゝ膝を突く。子方は「かくれつ」と又はづして作物に入る。「東雲の空も。ほの〳〵と明けゆけば」と。起きて東の空をながめやり。「我子と見えしは塚の上の」と作物を見上げ。「草茫々としてたゞ」と。面使ひて塚の草を見まはすもあり。又左右の手にて塚の上を撫づる形もあり。又は唯心持のみにて草茫

シテ子方を抱きとめんとす

子方を見失ふ



三日三　　五十四



能のしゃくの型　　五十五

々とながめわたすもありて。「しるしばかりの淺茅が原と。なるこそあはれなりけれ」と。正面へ直して泣きながら留むるなり。名づけて之をシヨリドメといふ。シテ歸りワキ歸り囃子方歸り地謠歸りて。舞臺の上また一人なし。隅田の流れ月おぼろに霞みて。念佛の聲ほ夜嵐におくらるゝの思あり。

融

前ジテ　汐汲む翁
　笑尉　附髮　鬚斗目　水衣　腰帶　扇
　田子荷ふ　腰蓑を用ふるもあり
後ジテ　融の大臣
　中將　金鉢卷　初冠　箔　指貫　狩衣　腰帶
　扇
ワキ　旅僧
　角帽子　鬚斗目　水衣　扇
アヒ　處の者
　長袴上下　扇

東國の僧都一見に上り。六條河原の院の舊跡をながめわたりしに。老翁の汐を汲まんとて出て來るに逢ひ。此院の來歷を聞き。又見えわたる名所々々を數へられなどしたりしが。俄に心づきて汀に立ちより。汐を汲み歸るとて跡も見えずなりたるをもて前ジテの一段とし。その翁は實は河原左大臣源融の亡靈にて。今や昔のまゝの衣冠を裝ひ。榮華を極めし其世の酒宴遊舞の有樣を見するをもて。後ジテの一段として作れる能なり。太鼓あ

り。季節は仲秋。土地は京都。

ワキ出で

ワキ出で丶名乘をなし。是は東國の僧なるが。此度思ひ立ちて都に上るよしの詞ありて。下歌上歌の道行を歌ふ。此「おもひ立つ心ぞしるべ雲を分け」の文句を歌ひながら橋掛より出でくる事。ワキの習にあり。之を思立之出といへり。道行すみて着セリフ例の如く。ワキいつもの處に着座すると。一聲になりシテ出て來る。右に田子をかたげ。前なるは繩をたぐりて持ち。後なるは左の手に持ちて腰へ附け居るなり。

思立之出

シテ出で

舞臺に入りて足を留め。「月もはや。出汐になりて鹽釜の。浦さびわたるけしきかな」を歌ひて田子の繩をおろし。「陸奥は何くはあれど鹽釜の。うらみて渡る老が身の。よるべもいさや定なき。心も澄める水の面に。照る月なみを數ふれば。今宵ぞ秋の最中なる。げにや移せば鹽釜の。月も都のもなかゝなの」のサシを歌ひて。今夜は仲秋なる

が。月の出づるに程もなき心を先づ述べたり。それより下歌上歌あり て。わが身の老を嘆くよしの述懐を歌ふ。此詞のトメ「浦わの秋の夕べかな」にて田子をおろし。仕手柱先の處に置く。

田子を下に置く

ワキはシテの立つを見て呼び掛け。「御身は此あたりの人か」と問ふ。シテ「此處の汐汲にて候」と答ふ。不思議やこゝは海邊にてもなきに誤りたるかとワキ問ふ。さてこゝをば何くと知ろしめしたるぞとシテ問ひ返す。こゝは六條河原の院と承りたるはとワキ答ふれば。河原の院こそ鹽釜の浦よとて。融の大臣陸奥の千賀の鹽釜を都の内に移されたる海邊なれば。鹽釜となど思さぬぞと論ず。やう〳〵尋常の翁ならざるを示せり。

ワキ問ひシテ答ふ

ワキ此に於て其謂を知り。さてはあれなるは雛が島かと問ひ。あれこそ雛が島にて。融の大臣の常に御船を寄せられ。御酒宴の遊舞さま〳〵なりし處ぞと答へつゝ。月影のうつれるを見て「月こそ出てゝ

月を見る

候へ」と見上ぐ。是より古詩の文句を掛合に吟ずる事などありて。シテ「おすも。」ワキ「たゝくも。」シテ「古人の心。」二人「今目前の秋暮にあり」と同吟しながらシテ詰足す。何となく興味あふるゝところなり。地の詞になりて。「浦わの秋も半にて」と靜に正面に出て。「松風も立つなりや」と見込みて。「霧の雛の島がくれ」と脇正面に面使ひながめやる前には。月の夜霧の晴れゆくさまゝて見ゆる心地す。「いざ我も立ちわたり」と左に廻りて。「千賀の浦わをながめんや。ちかの浦わをながめん」と。ワキに向ひ物語する心にて留む。

雛釜を移したる來歷をかたる

ワキ「鹽釜の浦を都の内にうつされたる謂御物語り候へ」と所望し。シテ「嵯峨の天皇の御宇に。融の大臣みちのくの千賀の鹽釜の眺望を聞召し及ばせ給ひ。此所に鹽釜を移し。あの難波の御津の浦よりも。日毎に潮を汲せ。こゝにて鹽を燒かせつゝ。一生御遊の便とし給ふ。然れども其後は相續して翫ぶ人もなければ。浦は其まゝ干汐となつ

て。池邊に淀む溜水は。雨の殘りの古き江に。落葉ちりうく松陰の。月だに澄まで秋風の。音のみ殘るばかりなり。されば歌にも。君まさて煙絶えにし鹽釜の。うらさびしくも見えわたる哉と。其之もながめて候」と語る。此カタリの間に「あの難波の御津の浦よりも」と。遠く難波の浦を見やる心にて右の方を見。「こゝにて鹽を燒かせつゝ」と正面に直す。こゝの處の謠ぶりに遠近の習ありなど。昔の人は言ひ置きたり。

名所を問ふ

地になりて「うらさびしくも荒れ果つる」と。右の方受けて景色を見渡す形ありて。「老の波も歸るやらん。あら昔戀しや」と。平座して面伏せ。「戀しや〳〵」と面直し。「音をのみ泣くばかりなり」と兩手にてしをる。懷舊の情に堪へざる心なり。

ワキ詞を掛け。見え渡りたる山々を御敎へ候へとて。音羽山より始めて名所々々の問答となる。シテ「語りも盡さじ言の葉の。歌の中山

清閑寺。今熊野とはあれぞかし。ワキ「さて其末に續きたる。里一村の森の木立。」シテ「それをしるべに御覽ぜよ。まだき時雨の秋なれば。紅葉も靑き稻荷山。」ワキ「風も暮れゆく雲の端の。梢も靑き秋の色。」シテ「今こそ秋よ名にしおふ。春は花見し藤の森。」此間に段々と東より南の方に見わたす心ありて。ワキ「綠の空も陰靑き。野山につゞく里は如何に。」シテ「あれこそ夕されば。」ワキ「野邊の秋風。」シテ身にしみて。」ワキ「鶉なくなる。」シテ「深草山よ」と歌ひながら。ワキの袖をひかへて二三足角の方へ出て。「木幡山伏見の竹田。淀鳥羽も見えたりや」と。指し廻して之を敎へ。仕手柱先に立ち歸りてロンギとなる。

深草山を數ふ

ロンギ

ロンギはなほ名所問答の內なれども。ワキの代表して地より問ひ掛け。「ながめやる。そなたの空は白雲の。早暮れそむる遠山の。峰も木深く見えたるは。如何なる處なるらん。」シテ「あれこそ大原や。小鹽の山も今日こそは。御覽じ初めつらめ」と。西南の方を見る心にて

脇正面に向ひ。「なほ〳〵問はせ給へや」と又ワキに向ひ。地「聞くにつけても秋の風。吹く方なれや峰つゞき。西に見ゆるは何くぞ。」シテ「秋も早。〳〵。半ふけゆく松の尾の。嵐山も見えたり」と。西をとくと見やる心にて橋掛の方に向ひて歌ひ。「嵐ふけゆく秋の夜の。空すみのぼる月影に」と正面に直し。シテ「興に乘じて。」地「身をばげに」と少し前に進み。「忘れたり秋の夜の」と兩手打ち合せて俄に思ひ出したる心を示し。「長物語よしなや」とワキに辭儀して別を告げ。「まづいざや汐を汲まんとて」と。田子を置きたる處に行きて「持つや田子の浦」と之をかたげ。大小前より正面先に出て〻。「汲めば月をも袖に望汐の」と。兩方の田子を前に投げ出だして滿ち來る汐を汲み入れ。きらめく影の田子の中まで浮べるさまをとくと見て。かたげながら脇座の方より舞臺の眞ン中まで靜々と運びゆき。「汐曇にかきまぎれて」と田子を後に捨てゝ。「跡も見えずなりにけり」と仕手柱にて留め。返しにしづ

汐を汲む

中入

アヒ

しづと中入す。夜ふけて風さむく。煙たえたる河原の院には。月と僧とのみ殘れり。

ワキは處の人を呼び出だし。千賀の鹽釜を此處へ移されたる謂れ御物語り候へと所望す。其かたる事の概略左の如し。

總じて此六條邊に鹽釜の浦を移されたる子細と申すは。融のおとゞと申せし人。春は花に戲むれ秋は月にめて。御酒宴の遊舞もつぱらとし給ふ。四季折々の御遊び申すばかりも御座なかつたると申し傳へ候。ある時おとゞ仰せられ候は。さて日本に面白き事は何か有るべきと御尋ね候處に。ある人申されは。何と申し候とも。陸奥の千賀の鹽釜にまして面白き處は御座あるまじきと申され候へば。さあらばやがて畫圖に仕り上げ申せとの御事なれば。畏り承つて即ち畫にかきて奉りければ。やがて御覽ぜられて尤面白かるべきと思召し。そ

能のしなり　二の巻

のまゝ此處に移されて。數千人の人足をもつて。津の國難波の浦よりも。毎日うしほを汲ませられ候。鹹に數珠を繰る如くに運び申したると承り及びて候。云々。

をはりてワキは。今こゝに一人の老人來り。汐汲なるよしを述べ。名所舊跡をも敎へ給ひ。まづ汐を汲まうずると有つて立ち給ふかと見て。汐曇にて姿を見うしなひて候と語る。かくてアヒ去りて後待謠となる例の如し。

待謠

後ツテ出づ

「磯枕。昔の衣をかたしきて。〈。岩根の床に夜もすがら。猶も奇特を見るやとて。夢待ち顏の旅寐かな。〈」の待謠すみて出端となり。冠に狩衣に指貫のシテ出づ。何か習事になる時は。小立烏帽子に小直衣を着し。太刀を佩く事もあり。

橋掛にて留めてワカ歌ひ出だす。「忘れて年を經しものを。又古に歸る波の。滿つ鹽釜の浦人の。今宵の月を陸奥の。千賀の浦わも遠き世に其名を殘す大臣。融のおとゞとは我事なり」と開き。「我鹽釜の浦に心をよせ。あの籬が島の松陰に」と右の方受けて見わたし。それより乘込拍子など踏みて。「三五夜中の新月の色」と開き。「ちへ降るや。雪をめぐらす雲の袖」と舞臺に入り。「さすや桂の枝々に」と角へゆき。「光を花と散らす裝」と左へ廻り。「こゝにも名に立つ白河の波の」と指し廻して見。「あら面白や曲水の盃」と扇開きて脇座の方より上げて行き。「浮けたり〈遊舞の袖」と仕手柱の處にて一つ酒を酌む形ありて。兩手にて扇を持ち。盃の心にて正面先へ出て拍子踏み。跡へたらたらと下りて達拜をなし。それより早舞となる。舞の間に扇を前に出だして橋掛三の松あたりまで行き。欄干際へ出てゝ盃の水に浮びつゝ流るゝを見る〈。興に乘じて舞臺に入る形あり。名づけて窺といふ。此時はシテの欄干際に立ち留まるを見て太鼓手を打ち。それより太鼓と小鼓とはナガシを打つなり。流儀によりては大鼓のナガス事も

早舞

クツロギ

十三段之舞
酌之舞笏之舞

あり。抑も此クツロギといふものは。四拍子の餘り面白く囃し立つるによりて。シテは覺えず橋掛に立ち舞を休息して聞き取れ居たりしより起るといふ。されば融に限らず他の早舞にもする事なれど。盃の浮ぶを見つゝ舞臺に歸る趣に活用せしは。更に妙味を添へたりといふべし。また十三段之舞とて五段を二度三段を一度舞ひ返す習もあり。觀世流にては酌之舞。寶生流などにては笏之舞などいふ秘事もあれど。さまてはとて此には略しぬ。

邯鄲

シテ　盧生　　作物　屋臺又は藥屋

邯鄲男　黑頭　唐織　法被　半切（用ひずに若流の事もあり）

クツワ　腰帶　唐團扇　數珠

子方　舞人　　風折烏帽子　袴　大口　長絹　腰帶　扇

ワキ　勅使　　厚板　大口　側次　腰帶　扇

トモ二人　輿丁　　ワキに同じ。又はモギドウ

ワキツレ　官人一兩人　　立烏帽子　厚板　大口

アヒ　宿りの女　　葛袴　側次　扇

もろこし蜀の國に盧生といへる人あり。楚國の羊飛山といふ處に貴き知識者のあるよしを聞き。身の行末の敎を乞はんとて旅

アヒの口明

立ちしが。道に邯鄲の里を過ぎ。一種霊妙の力ある枕を假りて。一睡せしに。みづから帝位に登り。不老不死の薬などを得て。榮花の内に樂しき春秋を送りゐたりしが。忽ち夢さめてもとの我身にかへり。羊飛山にゆくまてもなく。人間五十年の歡樂も唯斯くの如しと悟り得て。こゝに望を達し歸る事を作れり。太皷あり。季節知られず。土地は右にいへる邯鄲の里。

屋臺もしくは藥屋の作物脇座の方へ出づると。口明に女姿の狂言一人出てゝ先づ其いはれを述ぶ。「かやうに候ものは唐土邯鄲の里に住居する民にて候ふ。わらはゝ古へ仙の法を行ひ給ふ御方に御宿を參らせて候へば。お宿の爲めと思召し。邯鄲の枕と申すを給はりて候。此枕を召してまどろみ給へば。少しの内に夢を御覽じ。こし方ゆく末の悟を御開きある枕にて候。今日も又お旅人のお泊りあらばこなたへ申し候へ。其分心得候へ」とて。枕を屋臺の下なる一疊臺の上に持ちゆき。狂言柱の處に着座すると次第になる。

シテ次第にて出づ

シテ左に水晶の數珠を右に唐團扇を持ちて例の如く出て。囃子方の方を斜に向きて「浮世の旅に迷ひ來て。〳〵。夢路をいつと定めん」の次第を歌ふ。

傘之出

流儀によりては傘之出とて傘をさしいづるあり。「一村雨の雨やどり」といふ文句の意味なりといふ。其時はキリも狂言より傘をさしかけ入るなり。

名乗

低音にて地取する間に正面むき。「是は蜀のかたはらに盧生といへるものなり。我人間にありながら佛道をも願はず。たゞ茫然と明かし暮らすばかりなり。誠や楚國の羊飛山に。貴き知識のまします由承り及びて候程に。身の一大事をも尋ねばやと思ひ。只今羊飛山へと急ぎ候」と名のりて道行となり。「野暮れ山暮れ里暮れて。名にのみ聞きし邯鄲の。里にも早く着きにけり」と脇正面の方へ二三足出て。あ

道行

宿を借らんといふ

とへ又二三足もどりて到着せし心をあらはす。

着せリフありて橋掛の方に向ひ案内乞ふと。狂言立ちて「誰にて渡り候ぞ」と尋ね。「是は旅人にて候。一夜の宿を御貸し候へ」と聞きて。「安き間の御事お宿まゐらせうずるにて候。まづかう〳〵御通り候へ」といひて床几を持ち來る。シテ之に掛り居ると。狂言前に來り膝突きて。「さて見申せばお獨旅にて候か。何くより何方へ御通りなされ候ぞ」と問ふ。シテは羊飛山にゆくべき由を語り。アトは仙の法を行ふ人より給はりたる枕あれば一見し給へと勧む。「さらば立ち越え一睡見うずるにて候」とシテは答へ。「さあらば童は其間に粟の御臺を申し付けうずるにて候」とアトは言ひてシテの床几を持ち狂言柱の下にくつろぐ。シテしづ〳〵と臺の上にあがり。枕をとくと見て。「さては是なるが聞き及びにし邯鄲の枕なるかや。是は身を知る門出の。世の試に夢の告。天の與ふる事なるべし」といひて上歌になり。「一村雨

シテ枕を見る

シテ一睡す

勅使來る

の雨やどり」と一句シテ歌ひて地に渡し。「日はまだ殘る中宿に」と脇正面の方を西の空にして夕日の傾くをながめやり。「假寐の夢を見るやと」と枕を見て。「かんたんの枕に伏しにけり」と。仰向になり唐團扇を顔にあてゝ一眠りす。

この謡の未だ切れざる内に勅使なるワキ山てゝ臺の側へゆき。扇にて二つ臺を敲くとシテ起き直る。此時トモ二人輿の作物を持ち出てワキの後に控へ居るなり。ワキ「いかに盧生に申すべき事の候」といふ。シテ「そも如何なるものぞ。」ワキ「楚國の帝の御位を。盧生に讓り申さんとの。勅使これまで參りたり。」シテ「思ひよらずや王位には。そも何故に備はるべき。」ワキ「是非をば如何て計るべき。御身代を持ち給ふべき。其瑞相こそましますらめ。早々輿にめさるべし。」などの問答ありて。シテ「こはそも何と夕露の。光かゝやく玉の輿」と輿に目を附け。「乘りも習はぬ身のゆくへ」とワキを見る。「玉の御輿に法の

興に乗る

道の打切にて臺を下り正面に向くと。トモ來りて輿の屋根をさしかくるやうにす。是にて二三足出て。「夢とは白雲の。上人となるぞ不思議なる」と下に居ると。輿を引き。トモもワキも樂屋に入る。シテ輿に乗りて宮殿に着したる心なり。シテの立ちたるあとに殘したる數珠も枕も後見一先づ引く。夢中すでに王位に即きたる心なればなり。

來序にてワキツレ出づ

それより來序になりて子方ワキツレと出て來る。此間にシテは再び臺に歸りてクツラを取り。脇正面むき居ると子方ワキツレは脇正面よりシテの方むきて居ならぶ。いつしか邯鄲の假の宿は百官卿相雲の如く並み列なりたる紫宸殿とぞ化したりける。文句もて其有樣をあらはさしめて曰く。「ありがたのけしきやな。もとより高き雲の上。月も光は明らけき。雲龍閣や阿房殿。光も滿ち〳〵て。げにも妙なる有樣の。庭には金銀の砂を敷き。四方の門邊の玉の戸を。出て入

寢室忽ち玉宮となる

る人までも。光を飾るよそほひは。誠や名に聞きし。寂光の都喜見城の。樂しみもかくやらんと。思ふばかりのけしきかな。」さて又庭のけしきをあらはすとて。「東に三十餘丈に」と其方角を見て。「白銀の山をつかせては。黃金の日輪を出だされたり」と地に歌はせ。「西に三十餘丈に」と又其方角を見て。「黃金の山をつかせては。白銀の月輪を出だされたり」と同じく地に渡し。「不老門の前には。日月遲しと。いふ心を學ばれたり」と日月を指す心にて兩手を舉ぐる事もあり。

仙藥なすいむ

謠切るゝと一番のワキツレ手を突きて。「如何に奏聞申すべき事の候。御位に即き給ひては早五十年なり。然らば此仙藥を聞しめさば。御年一千歲まで保ち給ふべし。さる程に天のこんづやかうがいの盃。これまで持ちて參りたり」とて仙家の酒をすゝめ奉る。こゝに祝言の謠などありて子方扇をひらき御酌に立つ。シテ唐團扇にて之を受け。「めぐれや盃の」と歌ふ。是より肴に子方は立ちて舞ふなり。名づけて

子方の舞

邯鄲

夢舞といふ。大小前より正面へ出てゝ開き。右へ廻り又出てゝ開き「わが宿の」の上羽となる。それより大左右打込開き例の如く。「よもつきじ〳〵と角取りて廻り。「汲めども〳〵いやましに出づる菊水を」と。仕手柱際にて一つ酒を汲む形ありて。「心も晴れやかに」とハヲ扇し。「飛び立つばかり」より角へ指しゆき。かざし廻りて本の座に歸り左右して舞ひ納む。

シテ大きに興に乘じたる心にて。上羽すむと後向にくつろぎて法被の右の肩を脱ぎ。謠切れて樂を舞ふ。通例は黄鐘なれども替の形にては盤渉にする事あり。黄鐘も盤渉も笛の調子の名にて。その吹きやうに在る事なれど。從うてシテの拍子の踏方なども變る事なれば。シテにも四拍子にも總べて秘曲としてあるなり。樂の間にソラオリとて。舞曲の興に乘ずるあまり臺より踏みはづしては飛び上り。右の方の柱につかまりて頭ふり見わたす形あり。太鼓に合ひたる足など

樂

ソラオリ

ワカ

ありておもしろきところぞかし。總じて此邯鄲の樂は。わづか一枚敷の臺の上にて舞ふ事なれど。心は百疊敷もあるべき大舞臺にて舞ふ心なれば。唐船の狹き船中と知りつゝ舞ふとは事かはり。其心持なかるべからず。かゝる事まで味はひて見ればこそ能は面白けれ。ソラオリ過ぎてよりシテは臺を下り。舞臺を舞臺として舞ふ。既に臺の上下も分たず。舞闌になりて天下ことゝく舞臺の心持にやなりたりけん。トメはワカにて。「いつまでも。榮花の春も常盤にて」と上扇をなし。「なほ幾久し有明の月」と拍子ふみて左右し。「月人男の舞なれば」と出で。「雲の羽袖を重ねつゝ」と左の袖卷きたる上に唐團扇を重ね。「よろこびの歌を」と又左の袖かへして團扇の上に載せ。「歌ふ夜もすがら」と拍子ふみて角へ行き。「日は又いでゝ明らけくなりて」と空をながめやり。「實かと思へば」「月またさやけし」と。眞中にて頭取りて月を見。「春の花さけば」と指し廻して花を見。「夏かとおもへば」「雪もふりて」と角にてかざし雪のふるを見て。「春夏秋冬」とさしわけをなし。「萬木千草も一日に花さけり」と正面先に出でゝ。心も奪はれ見とられたるおもゝちありて。「おもしろや不思議やな」と跡に下り。臺に腰掛けながらイウケンしてながめ渡す。蜀山兀として阿房出てたりし其昔も。之には如何てと思はるゝばかりなり。此處「春夏秋冬」と一の松まで行き。欄干際に出てゝイウケンし跡に下りて。「かくて時すぎ」と舞臺に入るもあり。

シテもとの眠にかへる

かくて時すぎ頃去れば」の處にて後見枕を臺の上に直しおくと。シテは「誠は夢の内なれば」と立ちて。「皆さえ〳〵と失せ果てゝ」と指して廻る時。子方ワキヅレ皆切戸より樂屋に入る。シテは仕手柱先より枕へ向きて胸ざしゝ臺に上りて初の如く扇を顔に當てゝ寐るなり。此處一足飛に臺に飛び上りさま寐るもあれど。觀世流にては何の事なく上りて寐るを通例とす。又「さえ〳〵」との處。金春流にては切戸よ

シテを起す

り入らずして。地の前に行きて並び座し。能すみてシテの入る跡より入る形なるが。「みなきえ〳〵と」はシテの眼前より消え失せたる意味をあらはす文句なれば。地の前をばカケの心持にてくつろぎ居るさま。いかにも古風なるに似たり。この一條にても金春と觀世との差。すなはち保守と改進との別を味ひ得べきか。

「ありつる邯鄲の枕の上に。眠の夢は覺めにけり」の謠一ばいに。狂言臺の側に行き。扇にて二つ敲きて。「いかに御旅人。粟の御臺が出來て候。とう〳〵おひるなれや」といふと。シテは靜に起き直る。およそ此能を見る人。「眠の夢は」と寐る處をのみ花として。伴馬のは奇麗なりなどゝ評判すれども。それよりも此起き直る處。形を崩さずしてするは中々むつかしきものにて。シテの巧拙を見るべきはこゝにこそと。語りし人ありき。茫然と起き上りたる心も未熟の力にては現はす能はざるべし。

シテ夢さむ

脇正面より角掛けて平座し。心持ありて「盧生は夢さめて」と歌ひ出だす。夢中の遊舞花やかなりしに引きかへて。俄に打ちしめりたる心。變化の面白き處なり。地にて「盧生は夢さめて」を返し。「五十の春秋の。榮花も忽に。たゞ茫然と起きあがりて」と歌ひ。「さばかり多かりし」とシテ。「女御更衣の聲と聞きしは」と地。「松風の音となり」とシテ歌ひながら橋掛の松をながめやり。「宮殿樓閣は」と地。唯邯鄲の假の宿」と作物の柱を見上げ。地「榮花の程は。」シテ「五十年。」地「さて夢の間は粟飯の。」シテ「一炊の間なり。」地「ふしぎなりや計りがたしや。」などの掛合ありて。シテ「つら〳〵人間の有樣を案ずるに」と。兩手にて膝を抱へ考ふる形ありて「百年の歡樂も命をはれば夢ぞかし」と。地になりて顏傾けつゝ更に思案し。「五十年の榮花こそ。身のためには是までなり。榮花の望も齡の長さも。五十年の歡樂も。王位になれば是までなりげに。何事も一睡の夢」と再び面を伏せて悟りたる心を見せ。南

シテ悟る

無三寶〳〵」と團扇にて臺を一つ打ち。「よく〳〵思へば」と立ちて臺より下り三四足ゆき。「ちしさは此枕なり」と立ち歸りて臺に上り。「げに有難や邯鄲の」と枕を戴きて感謝の心を見せ。又臺より下りて常座にゆき。「夢の世ぞと悟り得て。望かなへて歸りけり」と。開き袖返し留拍子いつもの如くして舞ひ納む。

鉢木

作物　梅櫻松（臺に立て綿を雪の心に置く）

前ジテ　佐野源左衛門
直面　褐斗目　紫袍上下　小サ刀　扇

ツレ　同人妻
女面　葛　唐織

ワキ　旅僧
角帽子　水衣　數珠　扇　笠

後ジテ　前に同じ
白鉢卷　厚板　大口　側次　腰帶　小サ刀
長刀　鞭

後ワキ　最明寺入道
沙門帽子　白綾　大口　水衣　腰帶　クツワ
小サ刀　扇　數珠

ワキヅレ　侍臣
直垂上下　白鉢卷　梨子打　小サ刀　扇

アヒ　太刀持
狂言上下

同　早打

能のしなり　二の卷

最明寺入道時頼諸國行脚の姿となりて上野の國佐野のわたりに來り。源左衛門常世の家に一泊せんことを乞ふ。初は我等夫婦さへ住み兼ねたる躰なりとて斷りしが。妻の勸めも默しがたく。大雪の中を迷ひ疲れ給はんも痛はしとて。遂に呼び留め一夜の宿を貸す事となりぬ。されども火に燒く物もなければ。かねて秘藏せし鉢木の梅櫻松を切りくべ。わづかにもてなし申したる末。入道あるじの素性を問ふ。是は佐野常世がなれる果なるよしを答へ。今にも鎌倉に御大事あらば眞ッ先かけて出陣すべき志を述べたるに。此後鎌倉に上り給はゞ尋ね給へなど言ひすてて立ち出でたり。かくて鎌倉にては國々の諸軍勢を召集せらる事あり。常世も前に言ひたる言葉を違へず參會せしかば。入道これを賞して。まづ一族どもに横領せられゐたる常世が本領佐野の莊三十餘郷を返し與へ。又いつぞやの梅櫻松に報いんとて。加賀に梅田越中に櫻井上野に松枝。あはせて三箇の莊を更に與ふるといふ物語の能なり。太鼓なし。季節は冬。土地は前は上野。後は鎌倉。

そも〳〵此能の仕組は上にいへる如く。梅櫻松の返報に梅田櫻井松枝を與へらるゝなれば。右の三種の木を切る趣向なるを。徳川氏の頃。松を切るは松平氏に對して憚ありとて。松を切らぬ事に文句も形も作り替へたれども。終に至り返報に松枝を與ふる事のみは原作のまゝに殘り居るも前後撞着ならずや。そはとまれかくまれ。今日は松を切るとて遠慮すべき理由もなく。かくまで面白く出來たる作の文章に前後不揃なるは殘念なれば。原作に歸して松を切る事にしたきなり。おのれ此事を思ふこと久しければ。諸曲通解を始とし。あれやこれやと持論を書きた

れども。讀まれぬにや。感ぜられぬにや卒先して原作に復さんとする人なきこそいぶかしけれ。さて其原作は。「松はもとより常盤にて。薪となるは梅さくら」といふところ。「松はもとより煙にて薪となるも理りや」なりしなり。

ツレ座つく

ワキ出づ

嘲子方座に着き地謠出て並ぶと。ツレ女いて丶地の前に下に居る。常世の住居のていなり。

次第にてワキ出づ。名もなき旅僧と遂ひて實は最明寺入道なれば。品位高く重々しき風采なかるべからず。さて舞臺に入り。例の如く囃子方の方むきて。「ゆくへ定めぬ道なれば。〳〵。こし方も何くならまし」を歌ひ。地取の内に笠脱ぎ正面むきて。是ぞ一所不住の沙門なるが。信濃の國にありたるに雪深くなりしかは。一先鎌倉に歸るよしの詞あり。又笠を被りて道行となる。笠は雪中の心を示すなり。されどワキは質素を旨とすれば。雪の事は詞にあづけて。笠の上に綿の雪などは用ひず。

道行

「信濃なる。淺間の嶽に立つ煙。〳〵。遠近人の袖さむく。吹くや嵐の大井山。捨つる身になき友の里。今ぞ浮世を離坂。墨の衣の碓氷川。下す筏の板鼻や。佐野のわたりに着きにけり。〳〵」の道行あり て。あら笑止や又雪の降り來りて候。此所に宿を借らばやと思ひ候」と脱ぎたる笠を手に持ち。ツレの方に向ひ「いかに此屋の内へ案内申し候」といふ。ツレ立ちて「誰にて渡り候ぞ。」ワキ「是は修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。」ツレ「安き御事にて候へども。あるじの御留守にて候程に。お宿は叶ひ候まじ。」ワキ「さらば御歸りまで是に待ち申さうずるにて候。」ツレ「それはともかくもにて候。わらはゝ外面へ出て向ひ。此由を申さばやと思ひ候」といひて。角の方向きて待ち居る。ワキは後見座にくつろぎ居る。

宿を借らんと乞ふ

シテ出づ

シテ幕上げて出て來り。一の松にて踏みとまり正面むき雪の降りた

シテはツレの立ち居るを不審す

ワキシテと語る

るけしきを見て。「あゝ降つたる雪かな」と歌ふ。歌ひかたも見かたも味ある處なりといふ。雪を見て面白き處ならず。わが身今昔の感に堪へかぬる心なれば。まこと肺肝より出づるが如き調子にてこそ。多くの見物を感動せしむべきなれ。それより「いかに世にある人の面白う候らん」と我如く零落せぬ人の身を想像し。「それ雪は鷺毛に似て飛んで散亂し。人は鶴氅を着て立つて徘徊すといへり」と古詩を吟じ出だし。「されば今ふる雪も。もと見し雪にかはらねども。我は鶴氅を着て立つて徘徊すべき。袂も朽ちて袖せばき。細布衣みちのくの。今日の寒さをいかにせん」と。今の我身を嘆きながら。家に歸る心にて舞臺に入り來りしが。ツレの立ち居るを見て。「あら思ひよらずや。此大雪に何とて是にたゝずみて御入り候ぞ」といひ。ツレは修行者の來りしよしを語り。ワキは我事なりと名乗り出てゝ。餘りの大雪に前後を忘じたれば。日は高けれども一夜の宿を借りたきよしを述ぶ。

ワキ立ち出づ

ツレ宿を貸せとすゝむ

シテ呼び留めにゆく

されどもシテは餘りに見苦しければとて再三乞へども之を諾せず。是より十八町あなたに山本の里といふがあれば。そこにてよき泊りを御取りなされよといはれて。ワキは「あら曲もなや。よしなき人を待ち申して候ものかな」と獨言し。不興げに出でゝ後見座にくつろぐ。是は雪ふみわけて歩みつゝある處をカゲにしたるなり。

ツレはワキの出てゆく後影を見おくり。「あさましや我等かやうに衰ふるも。前世の戒行つたなき故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ。後の世の便りともなるべけれ。然るべくは御宿を參らさせ給ひ候へ」と歌ふ。シテ答へて。「左樣に思召さば。何とて以前には承り候はぬぞ。いや此大雪に遠くは御出で候まじ。それがし追つゝき留め申し候べし」とて。ワキを追つ掛くる心にて舞臺の眞ン中邊までゆくと。是より先ワキは靜に後見座を立ちて橋掛にゆき笠きたるまゝ三の松あたりの處に雪わけ惱む心にて立ち居るを。シテは見つ

けて「なふ〳〵旅人。お宿參らせうなふ」と聲高く呼び掛く。されども跡振り向かんともせざれば。「あまりの大雪に申す事も聞えぬげに候。痛はしの御有樣やな。もと降る雪に道を忘れ。今ふる雪に行方を失ひ一所にたゝずみて。袖なる雪を打ち拂ひ〳〵し給ふけしき」と歌ひながら。左の袖にて雪うち拂ふ所作を學び。古歌のこゝろに似たるぞや」と。定家卿の詠歌を思ひ出てたる心にて。「駒とめて袖打ち拂ふ陰もなし。佐野のわたりの雪の夕ぐれ」と正面むきて朗吟し。「かやうによみしは大和路や。三輪が崎なる佐野のわたり」と古今を比較しつゝワキの方に向ひ。地になりて「これは東路の。さのゝ渡の雪の暮に。迷ひ疲れ給はんより。見苦しく候へど。一夜は泊り給へや」と。段々早足に橋掛へ行き。ワキの袖に手を掛けて引きもどし。辭儀して先刻の無禮を謝し。お宿をまねらすべき心をあらはす。心地よく趣ある處なり。

ワキもシテも謙遜にる

「げに是も旅の宿」の打切にてワキ笠を脱ぎ。シテに先だちて舞臺に入り。「是は雪の軒ふりて」と軒を見上ぐる形をするシテもせぬシテもありて。「うき寢ながらの草枕。夢より霜や結ぶらん」と。ワキは脇座に。シテは眞ン中に向き合ひて座す。家に着きて主客席まづ定まりたるなり。

粟の飯なすいむ

此に於て御宿は申したれども夕飯として差し上ぐべきものはありやとツレに問ふ。貧家のさま先づ思ふべし。ツレ粟の飯ならば有るよしを答ふ。さらば申して見んとてワキに告げたるに。それこそ日本一なれば給はれと快く所望す。ワキの民情に通じたる面影すでにほの見えたり。尤も粟の飯をすゝむる文句のみにて。「總じて此粟と申す物は。古へ世にありし時は。歌によみ詩に作りたるをこそ承りて候に。今は此粟を以て身命を繼ぎ候」など物語る。この間にワキは箸取り居る心なりと知るべし。遂に粟の話は盧生が見し夢の古事に移

作物出づ

り。「あはれやげに我も打ちも寝て。夢にも昔を見るならば。慰む事もあるべきに。なふ御覧ぜよかほどまで」と我身の上を嘆息し。「すみちかれたる故郷の。松風さむき夜もすがら。寝られねば夢も見ず。何おもひてのあるべき」と。シテは懐旧の涙に咽ぶ思入あり。此謡の内に梅櫻松に雪のかゝりたる作物。本幕にて後見持ち出て。目附柱の方へ出だし置く。この作物。観世は座して切るなれば低く。他流は立ちて切るなれば高く。其ン中の正面先へ出だすもあり。夜更けて寒くなりたれば焼火をして参らせんとて。ふと秘蔵の鉢の木のあるを思ひ出だし。「あの雪持ちたる木にて候」と作物の方を見ていふ。ワキは之を押し止め。「自然又おこと世に出て給はん時の御慰にて候間。中々思ひもよらず候」といふを。「いやとても此身は埋木の。花さく世に逢はん事。今この身にては逢ひがたし」とシテは述懐し。たゞいたづらなる鉢の木を。御身のために焼くならば」とツレは勧め。

雪を拂ふ

シテ「是ぞ誠に雖行の。法の薪と思召せ。」ツレ「しかも此程雪ふりて。」シテ「仙人につかへし雪山の薪。」ツレ「かくこそあらめ。」シテ「われも身を」と地に渡して。「捨人のための鉢の木。切るとてもよしや惜しからじと」と立ちて扇ひろげながら仕手柱の方へ行き。作物の前にすゝみて。「雪うちはらひて」と扇にて三つ四つ枝の雪を拂ひのけ。あとへ下りて。「見れば面白や如何にせん」と。作物の植木に見とれて惜しむ心あり。此雪の拂方は。多くのシテは扇を作物にあてゝばた〳〵音のする程に打ちたゝき綿の雪を落す事なれど。金春廣成は唯拂ふ形のみして。扇をば作物に當てず少し離れてしたりしは。いかにも上品にてよろしと今も思ひぞ出てらるゝ。ある田舎にて小さく切りたる紙の雪を扇の間に挾みおき。雪うち拂ひてと扇を開けば。ばら〳〵と散るやうに仕掛けたりしは。却りて大不評判なりしとの笑話あり。能もかくなりては末路の嘆を免かれず。

「まづ冬木より咲きそむる」とくつろぎ扇たゝみ正面直す。是より扇を刄物の心にて持つ。こゝにて右の肩ぬぎサスガを持ちて出づる時もあり。「異木よりまづ先だてば。梅を切りや初むべき」と。作物の梅を見る。松を眞中にして梅は右に櫻は左にさしてあり。「見じといふ人こそ憂けれ山里の。折掛垣の梅をだに。なさけなしと惜しみしに」と。右の方受くるは。今目前の梅ならずして他の例を思ひやる處ゆゑ。よその方を向くなり。「今更薪になすべしと兼ねて思ひきや」と作物の前にゆき下居て。扇を刄物の心に振り上げ。一つ切りて左の手に梅の枝を持ち見て。綿の雪かゝりねたらばふるひのけて下に置き。「櫻を見れば春毎に」と左の方なる櫻を見。「今は我のみわびて住む。家櫻切りくべて緋櫻になすぞ悲しき」と。此度は扇逆手に要の方を下にして。突き切るやうに櫻を切り取り。同じく雪を拂ひて梅と一つに置き。「さて松はさしもげに」と松を見て歌ふ。それより「松はもとより」

梅を切る

櫻を切る

といふ時。のびて再び松を見るも。左の手いだして指すも。右の手の扇にて指すも。シテによりて色々あり。昔は此ところ「松はもとより烟にて」と松を切りたる形ありて。萬治元年に出版せし七太夫流仕舞百番などには。さやうに記してあり。「きりくべて今ぞ御垣守」と切りたる枝を集めてワキの前に持ちゆき。「衞士のたく火は御爲なり」と火を起す心にて二つ三つ右より左より扇ぎて。「よくよりてあたり給へや」とワキを左の手にて指すと。ワキは打ちくつろぎ火にあたる心にて安座するもあり。此扇ぎ方あまり近くによりて高く扇をあぐれば。烟がワキの顏まで及びてけむたかるべければ。心すべしとの口授などある處なりとぞ。

切りたる木をワキの前にて火にたく

「近頃よき火にあたり寒さを忘れて候」とワキのいふ間にシテは眞ン中に歸りて座し。「おん出により我等も火にあたりて候」と答ふ。ワキは更にあるじの名字はと問ひ。シテは名字もなきものなりと謙遜し。

シテの名字を問ふ

シテ名のる

強ひて問はれて。「これこそ佐野の源左衛門の尉常世がなれる果にて候」と名乗る。さらば何とてかやうに落ちぶれ給ひしぞと問ひ。一族どもに横領せられてかくまで零落せりと答へ。何とて鎌倉へ上りて理非の裁判は仰がれざるぞと問ひ。運の盡くる處は最明寺殿さへ諸國行脚の身となり給へりと述べ。更に言葉を繼ぎて「かやうに落ちぶれては候へども。御覽候へ是に物の具一領長刀一枝。またあれに馬をも一疋つないで持ちて候」と。居立ちて橋掛の方を脇の心にて見。

志を告ぐ

「是は只今にてもあれ鎌倉に御大事あらば。ちぎれたりとも此具足取つて投げ掛け。さびたりとも長刀を持ち。痩せたりともあの馬に乘り」と再び扇を上げて脇を示し。「一番に馳せ參じ着到につき。さて合戰はじまらば」とワキに答へ。地に渡して「敵大勢ありとても」と立ちて扇ひろげ。「一番に割つて入り」と兩手にてイウ.ケン扇し。大軍の中に突貫する心を見せ。「思ふ敵と寄り合ひ打ち合ひて」と扇前に出だして

楯となし。小サ刀の柄に手を掛けて拍子二つ踏み。「死なん此身の」と心持ありて。「此まゝならば徒に。飢につかれて死なん命」と扇取り直して右に廻り。「なんぼふ無念の事ぞふぞ」と打合して嘆息の心をあらはし。どうと下に居て面を伏す。天地ために動き鬼神ために泣くべし。

ワキ眼を告げて立つ

ワキ之を慰めて。「よしや身の。かくては果てじ只頼め。我世の中に在らん程。又こそ參り候はめ。暇申して出づるなり」と暗に時頼なる事をほのめかし。シテとツレとは同吟して。名殘惜しの御事や。始は包む我宿の。さも見苦しく候へど。暫しは留まり給へや」と別を惜しみ。ワキ「とまる名殘のまゝならば。さて幾度か雪の日の。」シテツレ「空さへ寒き此暮に。」ワキ「何くに宿を狩衣。」シテツレ「今日ばかり留まり給へや」の掛合ありて。「名殘は宿にとまれども。暇申して」とワキは笠持ちて立つ。「御出か」とシテもツレも立つ。「自然鎌倉に御上り

あらば御尋あれ。けうがる法師なり。披露の「昔は「公方の」縁になり申さんと地の謠になりて。ワキは靜に脇正面の方へ行き。シテとツレとは脇座と地の上の方に入り替り立ち並びて。「御沙汰すてさせ給ふなと」とワキはシテを指し。きッと其方を世に出だし遣はさんとの意を示すと。常世は辭儀して之を受け。いひすてゝ出船の。共に名殘やをしむらん」と。福王流はワキ打ちしをりて名殘惜しさを思はせ。賓生流は足を横に引きシテを尻目にとくと見て行く。とり〳〵に心持の違ふも面白し。春藤流は此間にて尻目にも見ずしをりもせず。たゞ心持だけにて深き思を見するに似たり。かくてシテツレはワキの歸るを見おくりて。正面直しシテは面伏せツレはしをりて名殘をしき心をあらはし。謠切るゝと早鼓になり。ワキの跡よりシテもツレも中入して幕おり。作物引け。更に幕上げて早打のアヒ出づ。上下の片肩脱ぎて杖を突き。鎌倉にて國々の諸軍勢召集ある旨を觸れ

中入
アヒ

歩く使なり。さて仕手柱先に立ちて次のやうなる文句を稱ふ。早鼓は仕手柱にて足とまると打ち止むるなり。

忙がしや〳〵。只今これへ出づること餘の儀にてもなく候。最明寺殿は天下の善惡を御存じなされんがために。諸國修行なされたると申すが。承り候へば四五日先に御歸りありたると申す。何としたる御事やらん。關東八州大名小名こと〳〵く物の具して鎌倉へ參られいとの御觸の御座あつたると申すが。遲く御座あるにより。二階堂承りにて。はや伊豆相模へ人を使ひ候間。殘る六箇國を我等に仰せ付け。早々參るやうにとの御事にて御座ある間急ぎ參らう。いかやうなる事にて御座あるぞと。皆々氣遣をなさるゝ事ぢや。何とはや是へ御參りあるが武藏の御人數ぢやと申すか。さても早い事。急いて御參り候へ。一段と奇麗なる事にて候。あれへ見えたるが下總の御人數か。まづ〳〵

見事な事かな。急いて御参り候へ。是へ御出あるは常陸の御人數。これが下野の御人數ぢや。さて〳〵見事な事かな。是なるが上總の御人數と申すか。やれ〳〵奇麗な御事ぢや。いまだ上野の御人數が見えぬ。急いて上野へ参らう。何と是へ御参りあるが上野の御人數か。やれ〳〵見事や。いづれも〳〵申さうやうもおりない。只御急ぎ候へさりながら。御人數より跡に歸りてはせんもない。我等の承つたる六箇國の分は御出候間。人數より先へ参り。御参着のよし申さうずるにて候。いそげ〳〵。

後ワキ出ヅ

アヒ　樂屋に入ると一聲になり。後ワキは旅僧なりし姿を改め。沙門帽子に大口をはき。紫の衣に袈裟かけて。時賴入道の裝束にて出て脇座に床几にかゝり。ワキヅレの二階堂。狂言の太刀持。その下に並び着席す。ワキの水衣は替裝束にて直垂の事もあり。

後ツテ出ヅ

早笛にてシテ出づ。通例は白鉢卷に厚板大口側次なれども。或は鍬形つけたる黑頭を用ふる事も。法被を着る事も。熨斗目モギドウの事もあり。長刀かたげて一の松にて遠く舞臺の方を見わたし。「いかにあれなる旅人。鎌倉へ勢の上るといふは誠か」と呼び掛け。「何おびたゝしく上るさぞあるらん。東八箇國の大名小名。おもひ〳〵の鎌倉入。さぞ見事にて候らん。白金物打つたる糸毛の具足に。金銀を延べたる太刀刀。銅ひに銅うたる馬に乘り」と正面にて歌ひ。「乘替中間きらびやかに。打ちつれ〳〵上る中に」と右の方受けて他の軍勢を見わたす心あり。「常世が常にかはりたる。馬物の具や打物の。物その物にあらざるけしき。さぞ笑ふらん去りながら。所存は誰にも劣るまじと。心ばかりは勇めども」と正面むきて。我身の見ぐるしき出て立ちなるを耻ぢ。されども忠義は萬人に劣らざる志を述べて慷慨し。「勇みかねたる痩馬の」と馬の首の方を見る心にて目を附け「あら道おそやンや」と氣をあせる思入ありて。長刀を左に持ち替へて石突を

シテ鄙離に入る

引きずるやうになし。腰にさしたる鞭を抜き出だして右の手に持ち。是より馬に鞭打ち馳せさする心にて。「いそげども〳〵。弱きに弱き柳の糸の」と地に歌はせ。「よれによれたる痩馬なれば」とシテ歌ひ。「打てども」と鞭にて後の方を一つ二つ打つ。是ぞ大口をばち〳〵と音するやうに打つ人あれど。音させぬ方が上品なり。かくて「あふれども」と拍子二つふみて馬にカク入れたる形をなし。跡へたら〳〵としさるは。「先へはすゝまぬ足弱車の」と馬の進みかぬる心なるべく。「乗り力なければ追ひ掛けたり」と。鞭にて右左と亂打しながら舞臺に入り。仕手柱先にて鞭を後に投げ捨て。長刀を肩に持たせて兩手掛け立ち居る。馬より下りて着到せし心なり。

ワキはワキヅレを呼びて國々の諸軍勢こと〳〵く來りたるや否を問ひ。「其諸軍勢に。如何にもちぎれたる具足を着。さびたる長刀を持ち。痩せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いで此方へ

狂言シテ誘れ出だす

來れと申し候へ」と命ず。こゝに於てツレは太刀持の狂言に其由いひつくると。狂言は立ちてこゝかしこ見まはり。シテを見つけて。驚流などにては。「むさき武者かな〳〵」など嘲る詞ありて。「急いで御前へ御參り候へ」といふ。シテ「何と御前へ參れと候や。」狂言「中々の事。」シテ「あら思ひよらずや。定めて人違にて候べし。」狂言「いや〳〵其方の事にて候。其子細は諸軍勢が中に。いかにも見苦しき武者を連れて參れとの御事にて候が。見申せば其方ほど見苦しき武者も候はぬ程に。さて申し候。急いで御參り候へ。」シテ「何とたとへば諸軍勢の中に。いかにも見苦しき武者に參れと候や。」狂言「なか〳〵の事。」シテ「さては某が事にて候べし。畏つたると御申し候へ」と。長刀つきかへて狂言の方へ向きしつかりと答ふると。狂言は「心得申し候」とて元の座にかへる。

シテ正面直して。「げに〳〵是も心得たり。某が敵人謀反人と申し上

シテワキの前に出づ

げ。御前に召し出だされ頭を刎ねられんも爲なと面伏せて嘆息せしが。「よし〳〵それも力なし。いて〳〵御前に參らんと。大床さして見渡せば」と決心して面上げ進まんとする心を見せ。「今度の早打に。上り集まる兵。きら星の如く並みゐたり」と正面へ出て。「さて御前には諸侍。其外數人なみゐつゝ」と左の方を見わたし。「目を引き指をさし。笑ひあへる其中に」と正面にて。「横縫のちぎれたる」とシテ歌ひながら腰の邊を腹卷のつもりにて見。「古腹卷に錆長刀。やう〳〵に横たへ」と。長刀を見て右にかいこみ。右に一つ廻りて仕手柱よりワキの方に。「わるびれたるけしきもなく。參りて御前に畏る」と。つか〳〵と眞ン中あたりまで行きて膝つくと。ワキより「やあ如何にあれなるは佐野の源左衛門の尉常世か」と言葉を掛け。「是こそいつぞやの大雪に宿かりし修行者よ見忘れてあるか」と聞きてワキの顔を見上げ。びッくりして跡に下り。長刀をば後に捨てゝ兩手を突き敬禮を表す。今

御教書を賜ふ

までは我頭を刎ねられんも知るべからずとて。死を決したるなれば。少しの油斷もせざる心にて寧ろ突進したりしが。始めて我身の撰拔して召し出だされしを知り。面目あまりておのづから頭の下りたる心なり。

是より常世が佐野にて申したる言葉を違へずして馳せ參じたる志を賞し。その本領なりし佐野の莊三十餘郷を返し與へ。又雪の夜のもてなしの返報として。加賀に梅田。越中に櫻井。上野に松枝。合はせて三箇の莊。子々孫々に至るまで相違なく知行すべき旨を言ひ渡し。安堵の御教書を懷より出だして與ふれば。シテは「常世は之を賜はりて」と歌ひ。其打切に立ちて之を兩手にて受取り。おしいたゞき。大小の前まで下りて。「三度頂戴仕り」と今一度またいたゞき。正面先へ出でゝ。「是見たまへや人々よ。はじめ笑ひし輩も。是程の御氣色。さぞ羨ましかるらん」と。前の方に御教書を見せびらかし。又右の方